

■【既設】森林生態系保護地域						1/2
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
森林生態系保護地域	朝日山地 あさひさんち	21,718.77	この地域の主要部分は、人為の介入がほとんど無く、我が国最大規模のブナ林等原生的な自然状態が維持されていることに加え、低地から高山帯まで広範な植生帯が存在し、亜高山帯針葉樹林を欠き低木林が発達する豪雪地特有の植生が見られるなど、変化に富んだ種々の生態系が展開し、多様な動植物が生息・生育している。これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するため設定する。	海拔1,200m以下の低地はブナを主体とする山地帯（冷温帯性）落葉広葉樹がその自然植生の主要な部分を被っている。海拔1,200～1,400m以上の高地の斜面はナナカマド、ミネカエデ、ミヤマナラ、チシマザサなどの低木群落からなる偽高地帯が成立する。海拔1,600m以上の高地は、ハイマツ、ヤハズハンノキ、雪田植物、高山ハイデ、風衝草原などの群落を展開する。	朝日山地森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。 ■今後の検討課題：①朝日山地森林生態系保護地域に介在する「村山市朝日地区郷土の森」は、生態系保護地域と同類の植生を有しており、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むことを検討する。②旧郷土の森における地元市町村との保存協定の取り扱いの検討が必要。【別添資料参照】	森林生態系保護地域 新名称：朝日山地
郷土の森	村上市朝日地区 むらかみしあさひちく	200.00	古くから地域の人々に親しまれてきた見事な原生林を保護するとともに、自然探勝や森林浴などに利用するなかで、地域振興にも寄与しながら、原生的なブナ林を長く後世に保存するために設定する。	ブナを主体とした広葉樹林が主体をなし、ブナをはじめ、トチノキ等の老齢の大径木が多く分布している。		
森林生態系保護地域	吾妻山周辺 あづまやましゅうへん	8,197.69	吾妻連峰一帯に賦存するアオモリトドマツを主体とした亜高山性針葉樹からなる原生的な森林と、山地湿原、雪田草原、瀑布等の変化に富んだ景観を有し、さらには、本地域を南限または北限とする植物の分布、原生的な森林に生息する貴重な動物相がみられる等自然に恵まれた地域である。これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するため設定する。	保護林は新高倉から一切経山（吾妻山）、東吾妻山の山麓まで広がり、北の一部分と南半分が天然生林となっている。吾妻山、前大嶺の東側には林地外が広がっている。オオシラビソ群集、クロベ-ヒメコマツ群落、ササ自然草原、イタドリ-コムスキ群落が保護林の大部分を構成している。	吾妻山周辺森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：吾妻山周辺
森林生態系保護地域	飯豊山周辺 いいでさんしゅうへん	18,343.01	新潟、福島、山形県境の飯豊山周辺の、日本海型気候区で豪雪地帯における典型的な山地帯から高山帯までの原生的な天然林を保存することにより、森林生態系からなる自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するために設定する。	山地帯にはブナ-チシマザサ群落、ヒメヤシャブシ-タニウツギ群落、ミヤマナラ群落などの自然低木群落が広く分布し、尾根にはクロベ-キタゴヨウ群落が見られる。河岸段丘にはブナ-ユキヅバキ群落も見られる。亜高山帯にはウラジロヨウラク-ミヤマナラ群団や、ササ自然草原が広く分布する。高山帯にはハイマツ群落、雪田草原、風衝草原が豊富に展開する。	飯豊山周辺森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：飯豊山周辺
森林生態系保護地域	小笠原諸島 おがさわらしょうとう	5,579.53	小笠原諸島は、過去に一度も大陸と陸続きになったことがない海洋島であり、島嶼生態系として、独自の進化を遂げた貴重な動植物が数多く生息・生育し、特異な森林生態系を有していることから、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林管理技術の発展、学術研究、環境教育等に資するために設定する。	小笠原諸島の植生は、小笠原諸島固有の種群により構成された常緑広葉樹林となっており、属及び種の形態は東南アジアの植物群に所属する。主要な植生に、ウドノキ-シマホルトノキ群落、モクダチバナ-テリハコブガシ群落、ワダンノキ群落、ムニンヒメツバキ-コブガシ群落、コバノアカテツ-シマイスノキ群落、コバノアカテツ-ムニンアオガビ群落、オガサワラビロウ-タコノキ群落がある。	小笠原諸島森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：小笠原諸島

■【既設】森林生態系保護地域				2/2		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
森林生態系保護地域	奥会津 おくあいづ	83,890.79	会津地域の南西部に位置する駒ヶ岳、燧ヶ岳、帝釈山、田代山一帯で標高およそ 1,000m以上の地域、さらに中西部の朝日岳、浅草岳、御神楽岳と連なる地域には、自然性の高い森林が広範囲に分布している。これら奥山のまとまった森林は、地域の骨格的な自然を形成している。また、野生動物の動物相も豊かであり、生態系を指標するイヌワシ、クマタカの生息も多く確認されている。とりわけ本地域から新潟県境にかけての峻険な奥山一帯は、日本に生息するイヌワシの個体群維持の中心地とも言うべき代表的な生息・繁殖地となっている。これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するために設定する。	山地帯ではブナ林が広域を占め、ミズナラ林等も見られる。高標高域には高山低木や雪田草原等が成立し、尾瀬地域では高層湿原がみられる。標高1,000m以上の自然性が高い森林を有する。亜寒帯。高山帯植生の占める割合が高く、尾瀬地域には高層湿原を有する。全体の7割はブナクラス域の自然植生が占める。	奥会津森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：奥会津
森林生態系保護地域	佐武流山周辺 さぶりゅうやましゅうへん	3,953.53	日本海側の森林植生から太平洋側の森林植生への推移帯にある原生的な森林の生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するために設定する。	この地域は、日本海型から太平洋型への植生の推移帯にあり、また海拔高850mから2337mまで約1,500mの標高差があることから、植物相も豊富である。この地域の垂直植生分布帯は、大きく分けて山地帯と亜高山帯の2つに区分される。山地帯の気候的極相はブナ・チンマザサ群落及びブナ群落であり、その典型的な群落は魚野川源流部と清津川流域の赤湯山周辺に見られ、渋沢周辺には特に亜高木層のよく発達したブナ林も見られる。山地帯にはブナ林、亜高山帯ではオオシラビソを主体にクロハ、コメツガ、トウヒが混生する林やダケカンバ林などがみられる。岩管山、裏岩管山の山頂付近を中心にハイマツ林、高山性疎地群落、風衝ササ・ヒゲノガリヤス群落が小面積出現する。	佐武流山周辺森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：佐武流山周辺
森林生態系保護地域	利根川源流部・燧ヶ岳周辺 とねがわけんりゅうぶひうちがたけ	20,085.77	森林生態系からなる自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するために設定する。	ブナ、オオシラビソ、クロハ、キタゴヨウ等の原生的な天然林と、雪田草原、ササ群落など豊富な植生が分布している。山地帯にはチンマザサ-ブナ群団が広がり、右岸側の雪蝕地形にはウラジロヨウラク-ミヤマナラ群団が成立している。また、細い尾根や岩尾根等にアカミノイヌツゲ-クロハ群集がみられる。川幅の狭いV字谷ではアラシグサ-カニツリノガリヤス群落分布する。亜高山帯にはオオシラビソ群落、ブナ群落が分布し、稜線の平坦部にはチンマザサ草原が広く分布している。	利根川源流部・燧ヶ岳周辺森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。	森林生態系保護地域 新名称：利根川源流部・燧ヶ岳周辺
森林生態系保護地域	南アルプス南部光岳 みなみあるぶすなんぶてかりだけ	3055.35	南アルプス最南端に位置し、光岳を始め中ノ尾根山等2,000mを超える一帯は、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な垂直分布が残されている。この原生林地帯は原生自然環境保全地域に指定されている等、森林生態系保護地域として後世に伝えていくにふさわしい森林であるため設定する。	この地域は、2,000mを超える山々が連なる一帯で、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な森林の垂直分布が残されている。標高1,700m付近までの区域は、沢筋から山腹にかけてはブナ、ミズナラ、サウグルミ、シオジ、カエデ類等の落葉広葉樹林、尾根付近ではウラジロモミ、コメツガ、ネズコ等の針葉樹林となっている。標高1,700m付近から上部は、コメツガを主体にウラジロモミ、トウヒ等の針葉樹林となっている。	南アルプス南部光岳森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。また、同種の植生を有し、隣接している「白倉林木遺伝資源保存林」と「中ノ尾根山の森林植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むこととする。	森林生態系保護地域 新名称：南アルプス南部光岳
林木遺伝資源保存林	白倉 しろくら	55.23	亜高山帯性植物のモミ、シラベ、コメツガ、トウヒ等の遺伝資源の保存を目的に設定する。原生状態を保ったこの地方の代表的な天然林である。	トウヒ、コメツガ等を主とした原生状態を保っている群落。保護林内は、コメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンシカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。	■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。【別添資料参照】	
植物群落保護林	中ノ尾根山の森林 なかのおねやまのしんりん	137.41	原生状態を保った代表的な天然林で、山地帯・亜高山帯・高山帯の森林植生の推移等が観察でき学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	モミ、ツガ、トウヒ、シラベ、ミズメ、ダケカンバ等の天然林。保護林内はコメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンシカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。		

■【既設】森林生物遺伝資源保護林							1/1
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称	
森林生物遺伝資源保存林	阿武隈高地 あぶくまこうち	1,189.84	大滝根山を水源とする夏井川を挟んで海岸よりの平野部から山間部への移行地域にあたり、アカマツ・アセビ群落、イヌシデ・イヌガヤ群落、モミ群落、コナラ群落が保存されており、これらの森林と一体となって自然生態系を構成する生物の遺伝資源を森林生態系内に保存し、将来の利用可能性に資するために設定する。	夏井川渓谷の極めて急峻な地形に、天然モミ、ヒメコマツを含むアカマツ針葉樹林とフナ、コナラ、イヌシデ等の温帯性落葉樹が成立。太平洋岸型の自然植生や植物相が現存している保護林であり、アカマツ-アセビ群落、イヌシデ・イヌガヤ群落、モミ群落、コナラ群落が報告されている。また、北限種(オオクボシダ、コバノヒノキシダ、マメスタラン、ナンキンナナカマド)、環境省指定植物(アカヤシオ、カヤラン、ヨウラクラ、ヒメフタバラン)、固有種等(アブクマトラノオ、シュウブソウ、ヒゲネワチガイソウ)など希少な植物種が報告されている。	阿武隈高地森林生物遺伝資源保存林は、井川渓谷の極めて急峻な地形に、天然モミ、ヒメコマツを含むアカマツ針葉樹林とフナ、コナラ、イヌシデ等の温帯性落葉樹林が広がり、当該地域の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。このように、本森林生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、フナ群落、アカマツ群落が分布する区域。これらの群落分布区域が保護林境界部に接する場合は、保護林外の国有林をバッファ区域として保護林に編入し、保護林の拡張を図ることを検討。	生物群集保護林 新名称：阿武隈高地	
森林生物遺伝資源保存林	越後山脈 えちびさんみやく	2,008.53	越後山脈に属する御神楽岳、本名御神楽岳、笠倉山、及び、日尊倉山周辺の自然状態が良好なフナ林及びサワグルミ・トチノキ林、スギ天然林並びにミヤマナラを主とする自然低木林など、日本海側多雪地の森林群落が大規模に良く保存されている地域において、これらの森林と一体となって自然生態系を構成する生物の遺伝資源を森林生態系内に保存し、将来の利用可能性に資するために設定する。	当地域の植物相は、気候的には温帯の多雪条件にあることから、日本海側に主に分布する日本海要素の植物が濃密に分布している。日本海要素の典型的な植物であるユキツバキは見られないが、多くの日本海要素の植物が生育し、日本海側の植物相を示すことが本地域の特色である。また、標高が1,400mに達しない山体であるにもかかわらずゴゼンタチバナ、ハナフキ、ツガザクラ等比較的多くの亜高山性植物が分布していることも特色としてあげられる。	越後山脈森林生物遺伝資源保存林は、越後山脈に属する御神楽岳、本名御神楽岳、笠倉山、及び、日尊倉山周辺の自然状態が良好なフナ林及びサワグルミ・トチノキ林、スギ天然林並びにミヤマナラを主とする自然低木林など、日本海側多雪地の森林植生が広がり、当該地域の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。このように、本森林生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：地帯区分の検討。コア区域は、御神楽岳、本名御神楽岳、笠倉山、及び、日尊倉山周辺の自然状態が比較的良好なフナ林及びサワグルミ・トチノキ林、スギ天然林並びにミヤマナラを主とする自然低木林など、日本海側多雪地の森林群落が大規模に良く保存されている区域とする。	生物群集保護林 新名称：越後山脈	
森林生物遺伝資源保存林	丹沢山地 たんざわさんち	880.85	フナ、ウラジロモミ林等が分布しており、霧の多い森林に見られる豊富なコケ類等の着生植物など、極めて多様性の高い植物相が形成されている。これらの植物によって構成される森林群集は多様でかつ保存状態も良好であるなど、植物遺伝資源の宝庫というべき特徴を持っている。これら森林と一体となって自然生態系を構成する生物の遺伝資源を森林生態系内に保存し、将来の利用可能性に資するために設定する。	地域的な特徴としては、本地域が関東山地の南部に位置していることに加え、南の箱根・伊豆地方及び富士山に隣接していることから、いわゆるフォッサマグナ地域の植生要素と、内陸的な中部・北関東の北方植物が混在する植生が形成されている。海拔1,300m以上の山頂部にはフナ-オオモミジガサ群落などが特異的に分布し、山腹及び山麓にはフナ-ヤマボウシ群集が広く分布している。	丹沢山地森林生物遺伝資源保存林は、フナ、モミを主体とする天然林が広く分布しており、霧の多い森林に見られる豊富なコケ類等の着生植物など、極めて多様性の高い植物相が形成され、当該地域の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。このように、本森林生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、海拔1,300m以上の山頂部に特異的に分布しているフナ-オオモミジガサ群落など。②鳥獣害対策の実施が必要。シカの食害により壊滅的な状況にある林床植生の回復。③主木をなすフナ枯損への対処。	生物群集保護林 新名称：丹沢山地	

■【既設】森林生物遺伝資源保護林						2/2
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	再編後の保護林区分
森林生物遺伝資源保存林	秩父山地 ちちぶさんち	2,122.86	標高1,120~2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有しており、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このため森林と一体となって自然生態系を構成する生物遺伝資源を自然生態系内に安定的、恒久的に保存することとし、将来の遺伝資源利用等に役立てつつ、これらの森林を後世に引き継ぐものとして設定する。	山地帯にはコメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹を主体に分布し、沢筋等の湿潤な立地ではミズナラ等の落葉広葉樹が見られる。亜高山帯にはシラビソ、ダケカンバ等が分布する。また、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している。	秩父山地森林生物遺伝資源保存林は、標高1,120~2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有した、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このように、本生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、同類の植生を有し、隣接する「十文字峠植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、生物群集保護林に組み込むこととする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保存地区は、稜線の風衝地、赤沢岳石灰岩地、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している区域。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。【別添資料参照】	生物群集保護林 新名称：秩父山地
植物群落保護林	十文字峠 じゅうもんじとうげ	22.6	コメツガ、シラベ、トウヒ等の常緑針葉樹を主とする亜高山帯の天然林で、林相は極相を示し、原生状態を示す貴重な森林として設定する。	コメツガ林、シラビソオオシラビソ群集からなる保護林である。ニホンシカの生息密度が高いため、生息状況調査と対策の検討が必要（生息密度管理対策）。		

■【既設】林木遺伝資源保存林						1/7
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	赤井岳ヒノキ あかいだけ	10.55	天然生ヒノキの遺伝資源を保存するために設定する。	ヒノキの天然分布の北限にあたる。保護林内は、主に、スギ、モミ、アカマツが優占している。ヒノキは、尾根上に混生している。なお、保護林の北側の保護林外には、直径100cmを超えるヒノキ林が存在する。	赤井岳ヒノキ林木遺伝資源保存林は、天然生のヒノキ群落の保護を目的とした保護林である。②分布限界域に位置するヒノキの希少な個体群であり、③他の個体群から隔離された同種個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。なお、保護林の北側区域に接して存在する、保護林外のヒノキ群落は、県立自然公園に係る民有地のため、保護林区域の拡張は不可。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：赤井岳ヒノキ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	赤谷山天スギ あかたにやま	3.00	裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源を保存するために設定する。	胸高直径40～80cmのスギが優占する林相。	赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①周りをミヤマナラに囲われた雪崩地形の尾根部といった特殊な立地に成立しているスギの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林を取り巻く同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
林木遺伝資源保存林	愛鷹山ブナ・スギ群落 あしたかやま	570.17	ブナ、ミスナラ、ヒメシャラ等の落葉広葉樹を主とした天然林で、林内には、ブナの純林とスギの天然林があり、また、アシタカツツジが自生しており、林木遺伝資源として貴重なものであり、これらを保存するために設定する。	ブナ、ミスナラ、ヒメシャラ等の落葉広葉樹を主とした天然林で、林内には、ブナの純林とスギの天然林があり、また、尾根筋にはアシタカツツジが自生している。	愛鷹山ブナ・スギ群落林木遺伝資源保存林は、林内には、ブナの純林とスギの天然林があり、また、尾根筋にはアシタカツツジが自生している。このように、森林生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、ブナ群落、スギ群落が分布する区域、アシタカツツジの生育する稜線の区域。これらの群落分布区域が保護林境界部に接する場合は、保護林外の国有林をバッファ区域として再編後の保護林に編入し、保護林区域の拡張を図ることを検討。	生物群集保護林 新名称：愛鷹山
林木遺伝資源保存林	一の倉・ブナ いちのくら	7.53	谷川岳におけるブナの遺伝資源を保存するため設定する。	ブナの天然林。保護林内は、胸高直径30～70cm程度の中齢～高齢級のブナが優占する林分が形成されている。保護林内にはギャップ部も多く、そこにはブナの亜高木、低木、稚樹が生育し、正常な更新が行われている。	一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林は、谷川岳におけるブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、周囲にも広く分布するブナ群落の林分であることから、遺伝資源としての希少性がそれほど高くないと考えられることから、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。	廃止
林木遺伝資源保存林	裏見の滝コナラ うらみのたき	4.96	コナラ・クリの遺伝資源を保存するため設定する。	アカマツが優占する林にコナラとクリが混在する林相。高木層は高さ23m、胸高直径26-60cm（最大はコナラ）程度。	裏見の滝林木遺伝資源保存林は、コナラ・クリの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、中間温帯林の低海拔地といった特殊な気候条件のもとに成立している、アカマツとコナラが混在した特徴的な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林とする。なお、保護林の周辺で同種の植生が分布する区域は民有林であるため、保護林区域の拡張は行わず、そのままの面積で移行させる。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：裏見の滝コナラ 遺伝資源

■【既設】林木遺伝資源保存林				2/7		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	大久蔵トチノキ おおくそう	8.83	裏日本型東北・北海道型におけるトチノキの遺伝資源を保存するため設定する。	ブナ・トチノキ林。トチノキの保存を目的とする保護林ではあるが、保護林内にはトチノキの生育は少ない。概ね中齢から高齢級のブナが優占し、大径木のトチノキ（胸高直系の最大134cm）が僅かに混生している程度。	大久蔵トチノキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるトチノキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①大径木に生育している希少化した個体群、⑤谷沿いの過湿地といった特殊な立地に生育する個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。ただし、保護林内のトチノキは老齢化が進み、現存量が少ない状況にある。このため、保護林に隣接する谷地形や凹型地形のところには湿潤地を好むトチノキが混生している可能性があるため、そのような地形を有する林班を拡張の対象として検討する。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の西側に隣接している谷地形に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：大久蔵トチノキ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	小川ブナ群落 おがわ	32.49	林木育種事業を計画的、能率的に実施するため現存する林木の優良遺伝子群を確保し、これを保存し、遺伝子補給源として活用するために設定する。	低標高地に生育するブナを含む群落。コナラ・ミスナラが優占し、ブナ（大径木）やイヌブナが散在している林相にある。高木層は高さ32m、胸高直径18-114cm（最大はブナ）、植被率100%で、ミスナラが優占し、コナラ、ブナなどが混生している。ただし、ブナの大径木は少なく、枯損が進行している。	小川ブナ群落林木遺伝資源保存林は、低標高地に残存しているブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林であり、小川ブナ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているブナ群落の保護を目的とした保護林である。また、定波シラカンバ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているシラカンバ群落の保護を目的とした保護林である。このように、これらの保護林は、①大径木に生育したブナ・ミスナラ・コナラなどの希少化した個体群、②低山帯といった分布限界域に位置するブナの個体群、⑥温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される冷温帯性の個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。なお、これらの保護林は隣接して存在していることから、低標高地のブナに代表させた一つの保護林として再編する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：小川低山帯ブナ 遺伝資源 低山帯に遺存しているブナであることを強調するため、「低山帯」を挿入する。 「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。
植物群落保護林	小川ブナ おがわ	67.42	ブナ・ミスナラを主体とした代表的な温帯性原生林で、この地方では学術上貴重な森林であり、これを保護するため設定する。	保護林内は全体的に樹高が低く、高木のブナは生育しているものの、高齢林には至らず成熟途上の段階にある。一部谷筋を主体に老齢成熟林が見られるが、老齢成熟段階にあるものはコナラやミスナラが主体となっている。		
植物群落保護林	定波シラカンバ さだなみ	3.60	県内におけるシラカバ自生地は非常に少なく、特に群生するシラカバは、この地方にとって学術上貴重なもので、これを保護するため設定する。	コナラやヤマザクラなどの雑木類にシラカンバが混生している天然生林。高木層は高さ26m、胸高直径19-41cm（最大はシラカンバ）、植被率100%で、コナラが優占し、アカシデ、シラカンバ、カスミザクラ、ヤマザクラなどが混生している。		
林木遺伝資源保存林	木戸川コナラ きどがわ	6.58	コナラの遺伝資源を保存するため設定する。	高齢級のコナラとモミが混在して優占する林相にある。コナラは非常に大きく、胸高直径80cm～90cmの個体が多く認められる。下層は1.5～2.0mのスズダケが5・5程度の被度・群度で保護林の全域で繁茂している。コナラの実生・低木は僅かで、今後はモミ林へと遷移していくと思われる。	木戸川コナラ林木遺伝資源保存林は、中間温帯に成立しているコナラ天然林の遺伝資源を保存するために設定された保護林であり、木戸川モミ・コナラ等植物群落保護林も同様に、中間温帯のモミが混在したコナラ天然林の保護を目的とした保護林である。両保護林とも、②中間温帯域の天然林として貴重である。また、①高齢級のモミとコナラが混在した同類の林相にあり、隣接しているため、一体的に管理することが妥当と考えられる。このため、両保護林を統合した上で、希少個体群保護林として再編する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：木戸川中間温帯コナラ 遺伝資源 中間温帯域に成立しているコナラ天然林であることを強調するため、「中間温帯」を挿入する。 「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。
植物群落保護林	木戸川モミ・コナラ等 きどがわ	101.65	モミ、コナラ等落葉広葉樹を主とした針広混交林で、原生林に準じた林層を呈し、その遷移等学術参考及び森林施業上の考証として価値が高く、これを保存するため設定する。	コナラとモミが優占する林が広がっている。モミやコナラの胸高直径は70～90cm程度あり、高齢林の林相にある。また、林床は、高さ1.5～2.0mのスズダケが5・5程度の被度・群度で保護林全域に繁茂している。		
林木遺伝資源保存林	切込・刈込湖コメツガ きりこみかりこみこ	35.28	天然林針葉樹の遺伝資源を保存するため設定する。	コメツガやアスナロなどが混交する針葉樹林。高木層は高さ30m、胸高直径15-90cm（最大はコメツガ）程度。	切込・刈込湖コメツガ林木遺伝資源保存林は、土壌が薄く礫の多い特殊な立地で土地的極相林を形成しているカラマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。⑤土地的極相林として成立しているカラマツの希少な個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林外の北西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：切込湖コメツガ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	喰丸峠ケヤキ くいまるとうげ	5.93	天然生ケヤキ・ミスナラの遺伝子を保存するため設定する。	林齢300～500年のケヤキが生育する。ほぼ全域がブナ・ミスナラ群落。胸高直径で100cmを超すケヤキの大径木は保護林の下部に偏って分布し、中部より上部は、中齢級のミスナラ林となっている。高木層は高さ20～29m、胸高直径30～158cm（最大はケヤキ）、植被率80%で、ミスナラ、ケヤキ、アカイタヤが優占している。	喰丸峠ケヤキ林木遺伝資源保存林は、大径木林として成立しているケヤキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①大径木に生育しているケヤキの希少化した個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：喰丸峠ケヤキ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	栗原川ウダイカンバ くりはらがわ	11.75	栗原川におけるウダイカンバの遺伝資源を保存するため設定する。	イヌブナやミスズ、シナノキ等の落葉広葉樹が混じるウダイカンバ林。保護林内は、ほぼ全域にわたって、高木層に胸高直径20～30cm程度のウダイカンバが優占し（被度・群度4・4程度）、シラカンバ、シナノキ、ブナ、モミなどが混生している。ただし、ウダイカンバには、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。	栗原川ウダイカンバ林木遺伝資源保存林は、先駆性樹種のウダイカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①先駆性樹種ではあるものの当局内で群落を形成しているウダイカンバは少なく、その個体群を保護対象としていること、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：栗原川ウダイカンバ 遺伝資源

■【既設】林木遺伝資源保存林				3/7		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	黒沢ウラジロモミ くろさわ	13.88	天然生ウラジロモミなどの遺伝資源を保存するため設定する。	本保護林の大部分は急峻な岩角地に成立しており、岩角地上には、ウラジロモミ・クロベ・ヒメコマツなどが混在する針葉樹林が成立し、岩角地下部の崖錐堆積地に、サウグルミ・トチノキなどの広葉樹が優占する溪畔林が成立している。高木層は高さ19~33m、胸高直径25-120cm（最大はウラジロモミ）程度。	黒沢ウラジロモミ林木遺伝資源保存林は、岩角地といった特殊な立地に成立しているウラジロモミやクロベなどの針葉樹の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。⑤特殊な立地に生育している針葉樹の個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：黒沢ウラジロモミ・クロベ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	コガネ沢 こがねさわ	28.21	天然林のブナ、イヌブナ、キハタ等の遺伝資源を保存するため設定する。原生状態を保ったこの地方の代表的な天然林である。	ツガやモミなどの針葉樹林が広がっており、針葉樹に混ざってブナやイヌブナなどの落葉広葉樹が混生している林相。高木層は高さ34m、胸高直径12-117cm（最大はモミ）、植被率90%で、モミが優占し、ツガ、イヌブナ、ブナなどが混生している。保護林の設定目的と比較して、ツガ・モミなどの針葉樹が優占する林相にあり、保存対象種のブナ、イヌブナなどの生育量は少ない状況にある。	コガネ沢林木遺伝資源保存林は、ブナ、イヌブナ、キハタ等の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①原生状態を保ったこの地域の代表的な天然林を構成する個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：コガネ沢ブナ・イヌブナ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	小松原ブナ こまつばら	9.02	裏日本型東北・北海道型におけるブナの遺伝資源を保存するため設定する。	崖錐斜面上に成立している、チシマザサ・ブナ群団に区分されるブナ林である。林内は幾条もの水流（小川）に浸食され、土砂崩壊も見られる。この浸食と積雪による影響からブナを含む林木の倒木、倒伏、枯損が多くみられる。本保護林に生育しているブナの胸高直径は30~60cm程度である。	小松原湿原植物群落保護林は、泥炭湿原と湿原植物の保護、および、ブナを主体としてオオシラビソの点生する天然林の保護を目的とした保護林である。このように、植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、再編に合わせ、隣接して存在し、ブナが優占して同様な林相にある「小松原ブナ林木遺伝資源保存林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、本生物群集保護林へ組み込むこととする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、下屋敷、中屋敷、上屋敷の3段からなる泥炭湿原とすることを検討。②旧林木遺伝資源保存林である「小松原ブナ林木遺伝資源保存林」の今後の扱いの検討が必要。【別添資料参照】	生物群集保護林 新名称：小松原湿原
植物群落保護林	小松原湿原 こまつばらしつげん	1,489.82	当該区域西側に広がる泥炭湿原と湿原植物の保護、および、ブナを主体としてアオモリトドマツ(=オオシラビソ)の点生する天然林の保護を図ることを目的に設定する。	小松原湿原は下屋敷、中屋敷、上屋敷の3段からなり、下屋敷から中屋敷の間にはブナ林があり、湿原の周囲はオオシラビソ林、ブナ林となり、湿原と森林の間にはアカミノイヌツゲ・クロベ群集のマント群落が発達している。湿原の大半はマヤガイ・イボミスゴケ群集が占め、窪地の池にはミヤマホタルイ、ヤチダモなどが純群落を形成している。湿原の登山路はすべて木道が設置され、保護状態は良い。		
林木遺伝資源保存林	西ノ湖畔ヤチダモ さいのこはん	18.05	ヤチダモの遺伝資源を保存するため設定する。	ミスナラとヤチダモの混交林が広がっている。湖畔域にヤチダモの優占する林分が見られる。木層は高さ38m、胸高直径24-90cm（最大はミスナラ）、植被率90%で、ヤチダモが優占し、ミスナラが混生している。	西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ミスナラ・ハルニシ植物群落保護林の三つの保護林は、何れも西ノ湖と中禅寺湖間の氾濫原に成立している湿潤立地性の天然林である（当該地域の谷型の天然林）。何れの保護林も、①ミスナラ、ハルニシ、ドロノキなどの大径木に生育した希少化した個体群を含み、⑤湿潤な立地を好むミスナラ、ハルニシ、ドロノキなどが混在または優占して生育する同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：千手ヶ原ミスナラ・ハルニシ・ヤチダモ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	千手ヶ原ドロノキ せんじゅがはら	13.20	ドロノキの遺伝資源を保存するため設定する。	ハルニシ、サウグルミ、オオハヤナギ、ミスナラ等の溪畔要素の樹種により構成される林分が広がっている。保存対象樹種であるドロノキは、保護林内ではほとんど確認されていない。		
植物群落保護林	千手ヶ原ミスナラ・ハルニシ せんじゅがはら	67.70	奥日光地帯の代表的樹種であるミスナラ、ハルニシが群生、特にハルニシ林は奥日光地域でも少なくなっており、保護の必要があるため設定する。	ミスナラ、ハルニシが優占する天然生林。戦場ヶ原湿原の南部に広がる標高約1300mの概ね平坦地に成立している。保護林内には、かつての氾濫原にミスナラとハルニシが混交する林分が広がる。高木層は高さ32m、胸高直径25-155cm（最大はミスナラ）程度。		
林木遺伝資源保存林	西ノ湖マツ さいのこ	16.5	チョウセンゴヨウ、ヒメコマツ等の遺伝資源を保存するため設定する。	保護林内はコマツガが優占しており、ヒメコマツは尾根筋に散在している。シカ食害による影響のためか、下層植生は貧弱。保存対象樹種であるチョウセンゴヨウは、プロット周辺では確認されていない。	西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林、西ノ湖ヤシオツツジ植物群落保護林の二つの保護林は、何れも西ノ湖の東側から南側の稜線から山腹急斜面に成立している乾性立地性の天然林である（当該地域の尾根型の天然林）。何れの保護林も、①岩角地といった特殊な立地を好むヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、シロヤシオなどが混在または優占して生育している同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ 遺伝資源
植物群落保護林	西ノ湖ヤシオツツジ さいのこ	39.74	原生林に準ずる森林で学術及び森林施業上の考証として必要なもの。西ノ湖岸の原生林の保護を図るため設定する。	保護林内には、ブナ、ウダイカンバ、カエデ類の広葉樹に、コマツガなどの針葉樹も混生する天然生林が広がる。護林内は、胸高直径40~80cm程度のコマツガ・ブナが優占し、シロヤシオが細尾根上に散在している林相にある。		

■【既設】林木遺伝資源保存林					4/7	
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	白川カシ群落 しらかわ	3.19	アカガシ、ウラジロガシ、スタシイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林である。林内には、ルリミノキ、カクレミノ等の大径木があり、多様な樹種構成を持つ林木遺伝資源として貴重なため設定する。	アカガシ、ウラジロガシ、スタシイ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林で、これらの常緑広葉樹にケヤキやオニタヤ等の落葉広葉樹が混交する林分があり、常緑樹、落葉樹ともに大径木により構成されている。保存対象樹種であるアカガシ・ウラジロガシなどの常緑広葉樹の最大胸高直径は96.0cm(25.0m)。植生遷移上の次世代を担う樹種として、中齢級のアカガシ、ウラジロガシ、カゴノキなどの常緑樹が林内に生育している。	白川カシ群落林木遺伝資源保存林は、暖温帯上部の常緑樹林を構成する樹種の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、②常緑広葉樹林帯の上地域のカシ林として重要であり、④このような植生帯に生育する常緑広葉樹の遺伝資源の保護を目的としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北東側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
林木遺伝資源保存林	谷川岳・サウグルミ たにがわだけ	8.28	谷川岳におけるサウグルミの遺伝資源を保存するため設定する。	崖堆積地に、胸高直径30～60cm程度の中齢～高齢級のサウグルミが優占する林分が形成されている。保護林全域にわたってこのような林相にある。若齢木は少ないが、幼樹は林下に散在している。	谷川岳・サウグルミ林木遺伝資源保存林は、サウグルミの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。⑤崖堆積地といった特殊立地に成立しているサウグルミの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 谷川岳サウグルミ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	中禅寺湖南岸ミスメ ちゅうぜんじこなんがん	18.86	ミスメの遺伝資源を保存するため設定する。	保護林は、急傾斜地と湖畔の緩傾斜地の地形から成っている。急傾斜地の尾根上はウラジロモミが優占し、急傾斜地の谷部は中～巨木が散在してイヌブナ・サウグルミ・コミネカエデなどが優占している。湖畔の緩傾斜地はオオバアサガラ・サウグルミ・オオイトヤマメイゲツなどが優占している。高木層は高さ33m、胸高直径25-75cm(最大はハリギリ)程度。ミスメの生育分布状況を把握するために保護林内を踏査したが、保護対象種であるミスメはほとんど見られない。シカ食害の程度が著しく、ミスメの更新に影響を与えている可能性もあると考えられるが、本来、ミスメは、岩角地、崩壊地などに出現するといった特性を有している樹木であるため、このような開放的な空間が出現しない限り、保護林内での自然更新は難しいものと考えられる。	中禅寺湖南岸ミスメ林木遺伝資源保存林は、ミスメの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、保護林内にミスメの生育はほとんど認められず、希少個体群保護林としての資質が高くないことから、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。	廃止
林木遺伝資源保存林	津島マツ つしま	3.43	津島マツの代表的な林分、学術又は森林施業上の考証として重要なため設定する。	この地域のアカマツ林は安定した古い地層が露出して風化しているような緩やかな尾根筋の貧栄養で水はけのよい立地に成立しており、津島マツはこのような立地で生育するアカマツから得られた林業種である。	5ha以上の面積要件に達しないことから、面積要件のみでは廃止の方向となる。ただし、国有林に囲まれた保護林であるため、拡張し、持続可能な方策を検討することも可能である。平成28年時点では帰宅困難地域の区域内にあるため、現時点では到達不可にあり、調査も不可なため、判断を保留する。	保留
林木遺伝資源保存林	那須街道アカマツ なすかいどう	41.81	東日本型東海、関東型におけるアカマツの遺伝資源を保存するため設定する。	河川沿いのヒメヤブランナーアカマツ群集、丘陵地のヤマツツジ・アカマツ群集、アカマツ植林が分布している。保護林周辺部を含め保護林内は、胸高直径20～75cm程度のアカマツが優占する林となっている。国道付近および保護林南東部では下草が刈られている。松枯れ対策が既に行われており、ほとんどのアカマツに松枯れ防止剤が注入されている。また、すでに枯損したアカマツを伐採したと思われる切り株がところどころにみられる。	那須街道アカマツ林木遺伝資源保存林は、東日本型東海、関東型におけるアカマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④東日本型東海、関東圏において良好に生育しているアカマツの遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：那須街道アカマツ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	根本沢シオジ ねもとざわ	21.28	シオジ、コメツガ、ミスナラ、その他の広葉樹の林木遺伝資源を保存するため設定する。	当該保護林付近は、根本沢西側に源を発する桐生川の最上流地帯で、川沿いの峡谷にシオジ林が分布している。シオジは太いもので胸高直径104cm、樹高20m内外。高木層は部分的にシオジが植被率100%で生育し、このような所は他の種が少ない。	根本沢シオジ林木遺伝資源保存林は、シオジの遺伝資源の保存を目的とした保護林である(設定目的には雑多な樹種が挙げられているがメインはシオジである)。⑤峡谷といった特殊な立地に生育しているシオジの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：根本沢シオジ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	白山ケヤキ はくさん	3.01	裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源を保存するため設定する。	山腹平衡斜面の急傾斜地に成立しているケヤキ群落。土地的極相林。高木層は高さ20～25m、胸高直径30-58cm(最大はケヤキ)、植被率100%で、ケヤキの他、アカイタヤ、ヒトツバカエデ、メグスリノキ、ケンボナシなどの溪畔林を形成する高木類が混在して生育している。	白山ケヤキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤土地的極相林を形成しているケヤキの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の南側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留

■【既設】林木遺伝資源保存林				5/7		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	八丁池ブナ群落 はっちょういけ	252.58	八丁池周辺のブナを主とした天然林で、樹齢が高く原生状態を保っていることから、林木遺伝資源として貴重である。また、伊豆半島の植物地理や植物気候を知る上でも貴重なものであり、これらを保存するため設定する。[保護対象種：ブナ、イヌシデ、ハリギリ、モミ]。	ブナを主とした天然林。胸高直径30～100cm程度のブナの中齢木～老齢木が散在し、ホオノキ、ヒメシャラ、イヌシデなどの落葉高木が混生する林となっている。ニホンシカによる林床植生の食害が著しく、ススタケはほぼ枯損状態にあり、低木類、落葉広葉樹の実生もほとんど見られない。保護対象樹種であるブナ、イヌシデは多く生育するが、モミ、ハリギリは少ない状況にある。	八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林は、活動を終えた火山である天城山の西麓にあるブナを主体とした天然林である。一方で、皮小平ブナ・ヒメシャラ植物群落保護林は、約3,000年前と地史的に新しい時期に噴火した溶岩上に成立しているブナを主体としヒメシャラが混生する天然林である。このように、両保護林とも火山地形上に成立した天然林であるといった共通性を有しながらも、地史的には、新旧を対比できる特徴を有する地域固有の生物群集を形成しているため、生物群集保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。	保留
植物群落保護林	皮子平ブナ・ヒメシャラ かわこだいら	4.06	極相のブナの下に途中相のヒメシャラが密生する天然林で、植生遷移上珍しいものでありこれを保護するため設する。	当該地域は約3,000年以前に噴火した火口で、やや湿った環境を持ち、ブナ林を上層木として林内に樹高の揃ったヒメシャラが密生する。高木層は高さ25～32m、胸高直径38～74cm（最大はブナ）程度。	■今後の検討課題：①保護林区域の検討。八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林の東側から、皮子平ブナ・ヒメシャラ植物群落保護林の西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。【別添資料参照】	
林木遺伝資源保存林	富士山大沢カラマツ・イラモミ・ウラジロモミ群落 ふじさんおおさわ	252.39	大沢崩れの左岸にあって、標高1,500～2,800mにあるカラマツ、イラモミ、ウラジロモミ等を主とした天然林で原生状態を保っていることから、林木遺伝資源として貴重である。また、富士山の植物の垂直分布が模式的で、林内には、ウラゲハクサンシャクナゲの大群落があり、これらを保存するため設定する。	カラマツ、イラモミ、ウラジロモミを主体とした天然林。大沢を中心とする西向斜面に成立するカラマツ林は大径木が多く、原生的自然環境にある。他にタカネノガリヤスダケカンバ群集、シラビソ・オオシラビソ群集が分布する。	富士山の山腹には、冷温帯から高山帯にわたる日本の植生の垂直分布が模式的に存在し、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として維持されてきている。現状では、個別の保護林がそれぞれ隣接して存在しており、日本の植生の垂直分布が模範的に残されている天然林として一体的に管理することが妥当と考えられる。このため、これらの保護林を統合し、300ha以上の面積要件を満たした生物群集保護林へ再編する。	生物群集保護林 新名称：富士山
林木遺伝資源保存林	浅木塚ヒノキ群落 あさきづか	20.43	丸尾の上に生じる針葉樹林は多いが、天然のヒノキが集団的に生育しているところは珍しく林木遺伝資源として貴重である。また、溶岩流上の植生遷移を知る上でも貴重なものであり、これらを保存するため設定する。	溶岩流上に成立した天然のヒノキ林（直径30～40cm程度、高さ12～18cm程度）である。保護林内にはススタケは広く見られなかったが、生育していたススタケはすべて稗のみの状態である。当該域内にはコイチョウランやキノチドリ等のラン科植物や、希少種であるオオクボシダ等確認されている。	■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、各保護林。バッファ区域は、周辺が国立公園特別保護地区、緑の回廊等として担保されているため、保護林内には設定せず、周辺の保全が担保された区域をバッファ区域として位置付ける。登山道、道路周辺、集団施設地区は、保全利用区域。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。【別添資料参照】	
植物群落保護林	富士山亜高山帯 ふじさんあこうざんたい	680.19	標高1,500m～2,300mに従って富士山の亜高山帯植生を代表する針葉樹の天然林で、富士山の植物の垂直分布や植生遷移を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	標高1,600m付近ではウラジロモミが優占し、コマツガ等の針葉樹が混じる。亜高木層～低木層は広葉樹も混じり、草本層はススタケが繁茂している。標高2,200m付近ではシラビソが優占し、ダケカンバやナナカマドが混じる。調査プロット周辺では、台風の影響と思われる倒木が多く見られた。標高2,300m付近はスコリア土壌で、裸地面積が大きく植物の生育量は少ない。オンタデやタイツリオウギ等の草本層が生育し、場所によっては樹高2m程度のミヤマハンノキが群生している。標高2,660m付近ではカラマツ群落が見られ、多雪の影響や風衝地であるため、幹が湾曲している。本保護林内にはシカの糞や樹皮剥離、食痕が多く見られ、影響は大きいと思われる。		
植物群落保護林	富士山東臼塚低山帯 ふじさんひがしうすづかていざんたい	74.08	標高1,400m～1,500mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、ミスナラ等の落葉広葉樹と主とする天然林で、富士山の植物の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、10～30cm程度のオオイタヤメイゲツ、エンコウカエデなどが優占して生育する林に、単木状に大径木のブナ、ミスナラ（少ない）、クマシデなどが生育している。ニホンシカの食害の影響が顕著で、林床のススタケは稗のみの状態。前回調査時からシカの糞や樹皮剥離が見られているもの、まだササが繁茂していたので、変化はここ数年間で起こっている。今後、根返りや土砂崩れなどが起こる可能性もある。		
特定地理等保護林	富士山 ふじさん	926.91	富士山は、氷河期が去った後も噴火を繰り返しているため、日本アルプスで見られる代表的な高山植物は見られない。宝永4年（1707年）に噴火してできた宝永第一、第二、第三火口がある。宝永山（2,702m）が赤茶けた山肌を見せている。西側の須走では噴火により、3mもの火山灰、火山砂礫が積もった。火山灰は江戸まで飛んだ。	当該保護林は、保護林内を通過する登山ルート（富士宮ルート）が他の登山口に比べて山頂までのアプローチが最も短く、登山者の利用が多い。保護林内は、民有地に接する山頂部は自然裸地で、自然裸地からつながる斜面下部にフシハタザオ・オンタデ群集、コケモモ・ミネヤナギ群落、カラマツ群落などの自然植生が分布している。	富士山特定地理等保護林については、旧特定地理等保護林としての保護対象が新しい保護林制度の保護対象に当てはまらないが、生物群集保護林としてのポテンシャルのある区域が存在するため保留扱いとする。	保留
					■今後の検討課題：①保護林区域の検討。富士山生物群集保護林と同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討。	

■【既設】林木遺伝資源保存林						6/7
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	二岐山ミスメ ふたまたやま	8.17	天然生のミスメの遺伝資源を保存するため設定する。	保護林内にミスメの生育量は少なく、一部に散在している程度である。ヒノキアスナロの繁茂に伴い、ミスメは衰退しつつある。高木層は高さ20~26m、胸高直径30~90cm(最大はブナ)、植被率90%で、ヒノキアスナロが優占し、ミスメ、ブナが混生して生育している。	甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林は、ブナ、ミスナラ、アスナロ群落により構成された多様な森林からなる天然林である。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、同様の植生を有し、甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林に隣接する「二岐山ミスメ林木遺伝資源保存林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、生物群集保護林に組み込むこととする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保護林外縁部の稜線上には、高山帯低木群落、亜高山帯針葉樹自然低木群落が分布し、保護林区域のほぼ全域が、ブナやアスナロの優占する自然林によって占められていることから、保護林内をコア区域とし、保護林外にバッファ区域を設定することを検討する。②甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林内におけるミスメの生育状況を把握し、ミスメの現存量が少ない場合、旧二岐山ミスメ林木遺伝資源保存林内のミスメの保全の取扱いを検討する。【別添資料参照】	生物群集保護林 新名称：甲子・二岐山周辺
植物群落保護林	甲子・二岐周辺冷温帯ブナ かし・ふたまたしゅうへん れいおんたい	3,091.91	ブナの植物群落を保護するため設定する。	甲子山、赤岳(赤崩山)、三本槍岳(三倉山)が連なる稜線の東面および鎌房山の南東面の標高700~1,800mの甲子地区と、二岐山の南東および小白森山の西面の標高900~1,600mの二岐地区の急斜面(20~40度)に成立しているブナ、ミスナラ、アスナロ群落。ほとんどの区域がブナ林に覆われ、二岐山や小白森山の山頂付近には、亜高山帯にみられる針葉樹の自然低木林であるキャラボク群落が分布している。また、山腹には、アスナロ群落(ヒノキアスナロ群落を含む)が分布している。三本槍岳付近の高山帯には、コケモモやハイマツ等からなる高山低木群落が分布し、その下には亜高山帯植生の草原であるササ群落が広がっている。	武尊山シラカンバ林木遺伝資源保存林は、シラカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、陽樹のために既に衰退が認められ、今後はブナ林へと推移し、将来的にはシラカンバの遺伝資源の保存は困難と考えられる。このため、希少個体群保護林に移行せず、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。 ■なお、このまま存続させ、遺伝資源保存林としての目的を踏襲させていく場合は、伐採して、更地をつくりながらシラカンバを更新させるといった整備が必要となる。【別添資料参照】	廃止
林木遺伝資源保存林	武尊山シラカンバ ほたかさん	8.60	武尊山におけるシラカンバの遺伝資源を保存するため設定する。	胸高直径15~35cm程度のシラカンバが優占し、次世代を担うブナやアカイタヤが高木層に混生し始めている林相にある。保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢の衰えや枯損が目立ち始めている。当面はシラカンバ林として維持されるものと思われるが、次世代を担うシラカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、今後、シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと考えられる。また、本保護林に隣接するスキー場・キャンプ場敷地内のシラカンバは、直径が保護林内のものと同程度のため、同時期に成立したのと考えられる。このシラカンバは、下層が整理されているため樹勢が良い。保護林内のシラカンバは、林内に生育する落葉高木との競合が著しいため、光合成量が減少し、枯死に至っているものと考えられる。	武尊山シラカンバ林木遺伝資源保存林は、シラカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：楢橋ブナ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	楢橋ブナ ほだばし	17.60	本林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるブナの遺伝資源を保存するため設定する。	胸高直径30~45cm程度のブナが保護林の全域にわたって優占している。	楢橋ブナ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④裏日本型東北圏において良好に生育しているブナの遺伝資源の保護を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：楢橋ブナ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	目指岳コウヤマキ めさしだけ	10.33	裏日本型東北・北海道型におけるコウヤマキの遺伝資源を保存するため設定する。	典型的な雪崩地形にあり、流れた地形にはミヤマナラ、マルハマツクを中心とした自然低木林が広がり、コウヤマキの生育は、一部の尾根上に限られ、数本が生育している程度である。ただし、保護林外の福島県側には多数生育している。	目指岳コウヤマキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるコウヤマキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。⑤雪崩地形の細尾根といった特殊な立地に生育し、②分布の北限に当たる個体群を保護対象としていること、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。目指岳に連なる尾根に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。ただし、福島県側の国有林は一部で、多くは民有地である。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：目指岳コウヤマキ 遺伝資源
林木遺伝資源保存林	元清澄山 もときやすみやま	170.29	房総半島においては数少ない、モミ、ツガを主とし、カシ類等の暖温帯性植物が混生する天然林である。また、林内にはヒメコマツやキヨスミツバツツジ等が自生しており林木遺伝資源として貴重であり、これらを保存するため設定する。	尾根部においてはモミとツガが混交するモミ・ツガ林が分布し、斜面部においては、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシなどのカシ類が優占した常緑広葉樹林が分布している。保護林全体に、二ホンジカの糞や角研ぎ痕が多い。また、ヒメコマツについては、林木遺伝資源の保存のための個別個体管理が、千葉県、東大演習林、千葉森林管理事務所からなるヒメコマツ保全協議会により実施され、保全が図られている。キヨスミツバツツジについては、本調査では詳細な情報については収集していないため、生育個体数や個別個体の生育状態については不明な点が多い。	元清澄山林木遺伝資源保存林は、隔離分布しているツガ、ヒメコマツ、清澄山周辺の固有変種であるキヨスミツバツツジ(ミツバツツジの変種)の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。これらの、①希少化している個体群、②分布の南限に当たる個体群、③他の個体群から隔離された同種個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群、⑤岩各地といった特殊な立地に成立している個体群、⑥温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：元清澄山暖温帯性ツガ・ヒメコマツ・キヨスミツバツツジ 遺伝資源

■【既設】林木遺伝資源保存林							7/7
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称	
林木遺伝資源保存林	八溝山アカシデ・ケヤキ やみぞさん	43.59	天然生のアカシデ、ケヤキの遺伝資源を保存するため設定する。	本保護林は、ミズナラが優占して生育する林相にあり、保存対象樹種であるアカシデは、ミズナラ林の一部の林分に僅かに混在している程度でしかない。また、ケヤキについても保護林内の谷地形の一部に生育しているに過ぎない状況にある。このため、本保護林内でのアカシデ・ケヤキの林木遺伝資源の保存には難題を伴うと評価される。なお、本保護林の尾根筋には、胸高直径が15~20cmに及びシロヤシオが密度高く生育し、みことな群落を形成している。	八溝山アカシデ・ケヤキ林木遺伝資源保存林は、アカシデ、ケヤキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。ただし、アカシデ、ケヤキは保護林内には少なく、これらの遺伝資源の保存は難題を伴うと評価されている。一方で、本保護林内には、①希少化している個体群である、シロヤシオ群落の生育が認められている。このため、保護対象を希少化している個体群であるシロヤシオ群落に変更した上で、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：八溝山シロヤシオ アカシデ、ケヤキの現存量が極めて少ないことから、当初設定の目的自体が達成されておらず、保護林自体の機能を、『植物群落保護林』に変更する意味合いで、八溝山シロヤシオに名称を変更する。	
林木遺伝資源保存林	湯滝ミズナラ ゆたき	13.18	ミズナラの遺伝資源を保存するため設定する。	保護林の北部側にミズナラが優占する林分が見られる。ほぼ平坦な山腹平衡斜面に成立しているミズナラ群落。高木層は高さ32m、胸高直径17-74cm（最大はミズナラ）程度。	湯滝ミズナラ林木遺伝資源保存林は、ミズナラの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④遺伝資源の保存を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の西側と南側に隣接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：湯滝ミズナラ 遺伝資源	
林木遺伝資源保存林	竜頭の滝カラマツ りゅうすのたき	12.98	天然カラマツの遺伝資源を保存するため設定する。	保護林内はミズナラが優占する林分。カラマツの生育はほとんど見られない。保護林の隣接地にはカラマツ林が存在している。高木層は高さ26m、胸高直径15-98cm（最大はカラマツ）程度。	竜頭の滝カラマツ林木遺伝資源保存林は、カラマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④遺伝資源の保存を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北側に隣接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：竜頭の滝カラマツ 遺伝資源	
林木遺伝資源保存林	龍ノ山キタゴヨウマツ りゅうのやま	5.63	天然キタゴヨウマツの遺伝資源を保存するため設定する（設定時：天然ヒメコマツの遺伝資源を保存）。	保護林内は、スギとブナが優占し、ヒメコマツは尾根筋に少数が生育している。保護林の周辺も同様な状況にあり、保護林周辺の尾根部にもヒメコマツの生育が認められる。	龍ノ山キタゴヨウマツ林木遺伝資源保存林は、ヒメコマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④遺伝資源の保存を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。ただし、ヒメコマツは保護林内には少なく、保護林周辺の尾根部にも散在している状況にある。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林周辺の尾根を含む区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 龍ノ山ヒメコマツ 遺伝資源 生育している種が、キタゴヨウではなくヒメコマツであることから、『ヒメコマツ』に変更する。	

■【既設】植物群落保護林							1/12
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称	
植物群落保護林	赤谷天スギ あかたに	143.95	通称赤谷スギと呼ばれる天然スギの林分で、種及び学術又は森林施業上貴重な森林であることから、この森林の保護を図るため設定する。	中齢から高齢級のスギが生育している。生育しているスギ立木に枯損木はほとんど見られず、健全に生育している。一部、ツキノワグマによる剥皮がみられる。高木層は高さ25～29m、胸高直径30～104cm（最大はスギ）程度。	赤谷天スギ植物群落保護林は、原生状態を保ったスギ群落の保護を目的とした保護林である。①大径木に生育した天然林を構成するスギの希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：赤谷スギ	
植物群落保護林	安倍峠オオイタヤメイゲツ あべとうげ	10.19	オオイタヤメイゲツの大木が群生しているもので、珍しく貴重なものであり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径30～60cm程度のオオイタヤメイゲツが優占し、イタヤカエデ、ブナなどが混在する林相となっている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うオオイタヤメイゲツの生育は少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、オオイタヤメイゲツ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。また、シカの食害による林床植生の衰退により、裸地化の進行に伴う土壌流出、さらには、それが引き金となり、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるのではないかと考えられる。	安倍峠オオイタヤメイゲツ植物群落保護林は、原生状態を保ったオオイタヤメイゲツ群落の保護を目的とした保護林である。⑤ブナの入り込めない環境に土地的極相林として成立し、①老齢木に生育したオオイタヤメイゲツの希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害により壊滅的な状況にある林床植生の回復。	希少個体群保護林 新名称：安倍峠オオイタヤメイゲツ	
植物群落保護林	天城太郎杉 あまぎたろうすぎ	0.05	このスギは、「天城太郎」と呼ばれ、天城山中随一の巨木であり、これを保護するため設定する。静岡県天然記念物「天城の太郎スギ」(S39,10,6)として指定されている(根廻り13.6m、樹高40.0m)。	本保護林は、対象木は天城山中随一の巨木で、根回り13.6m、樹高40.0mとある。環境省作成の説明看板には、樹高48m、根回り13.6m、幹回り9.6mで、県の天然記念物に指定されている。活力度は良好。後継樹なし。周辺は植栽のスギの壮齢林が成立。	天城太郎杉植物群落保護林は、天城山中随一の巨木であるスギを保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。一方、静岡県の天然記念物にも指定されているため、引き続き担保されることとなる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止	
植物群落保護林	飯豊スギ いいで	36.00	天然生飯豊スギを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径40～60cm程度のスギが優占する林となっている。	飯豊スギ植物群落保護林は、原生状態を保ったスギ群落の保護を目的とした保護林である。①大径木に生育した天然林を構成するスギの希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：飯豊スギ	
植物群落保護林	筏場お礼杉 いかだば	0.83	伊豆天城山が徳川幕府の天領として、韮山代官が管理していた頃(宝暦時代)、地元村民が雑木や下草採取のお礼としてスギを植栽したもので「お礼杉」と呼ばれている。天城山におけるスギの生育状態を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	当該保護林は植栽起源のスギの純林で、高木層はスギのみが生育する。スギの樹高は高いもので45m近くあり、胸高直径は70cmを超えるものが多く、大きいものでは100cmを超える。林床は非常に疎で、ミヤマシキミ、イヌガシ、マツカゼウなどのシカの不嗜好性植物が生育している程度である。	筏場お礼杉植物群落保護林は、宝暦時代に植栽されたスギを保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、保護林の周辺は、スギの植林地となっており、本保護林と同様の林相は周辺には存在していないため、保護林範囲の拡大も不可である。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止	
植物群落保護林	板木暖帯性 いたき	10.68	リンボク、カゴノキ等暖帯性分布の北限地帯となっていることから、これを保護するため設定する。	板木国有林の山腹中央～下部に分布する天然生林である。保護林内には、アカマツ、コナラ、シラカシ等により構成される天然生林が広がっている。保護林内は、胸高直径20～30cm程度のコナラが優占し、ウラジロガシやアカシテが混在する林相となっている。尾根上には高直径40～60cm程度のアカマツが優占している。ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖帯性の種は生育しているが、保護林の設定目的である暖帯性のリンボクおよびカゴノキは、プロットへのアプローチルート途中も含め、本調査では確認されず、これらの種は保護林内に局所的にしか生育していないのではないかとと思われる。	板木暖帯性植物群落保護林は、暖帯性分布の北限となっているリンボク、カゴノキ等の保護を目的とした保護林である。希少個体群保護林の面積要件は満たしているものの、保護林の設定目的である暖帯性のリンボクおよびカゴノキは、保護林内に局所的にしか生育していないのではないかとと思われる。また、本保護林は、文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物に指定されているため保護の担保性が高い。このため、保留扱いとし、今後の取扱いについて、現況調査を行うことなどにより、保護林として存続するのか、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図るのかを検討することとする。【別添資料参照】	保留	
植物群落保護林	犬ヶ岳ホンシャクナゲ いぬがたけ	115.00	ヒメコマツ、ネスコ等の点生する天然生林と、下層植生であるホンシャクナゲ群落の保護を図るため設定する。	本保護林は、北アルプス北端の犬ヶ岳から黒岩岳を結ぶ稜線の、新潟県側である東斜面に位置し、標高1,350～1,620mに広がる天然生林である。傾斜は30度以上で、林況はヒメコマツ、ネスコ等が点在し、下層にホンシャクナゲが生育している。本保護林内におけるホンシャクナゲの分布は、風衝地低木林が広がる犬ヶ岳～サワガニ山までは、クロバヤハイマツ低木の林下や、アカミノイヌツゲ、ナナカマド低木に混じり、比較的密度高く生育しているが、サワガニ山を超えると、オオシラビソやダケカンバの亜高木林が見られるようになり、ホンシャクナゲは、オオシラビソ樹冠下や、株立木の根元などのササの密度が薄いところの林下に僅かに生育しているに過ぎない状況にある。このように、保護対象種であるホンシャクナゲの生育量は全体的には少ないが、保護林の北部を中心に比較的多く生育し、稚樹から高さ1m程度のものまで生育している。	犬ヶ岳ホンシャクナゲ植物群落保護林は、林下にホンシャクナゲの生育する原生状態を保った群落の保護を目的とした保護林である。①ホンシャクナゲの希少な個体群を保護対象としていること、⑤稜線沿いといった特殊な立地に生育している個体群を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：犬ヶ岳ホンシャクナゲ	

■【既設】植物群落保護林				2/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	岩岳山のアカヤシオ・シロヤシオ いわたけさん	199.39	原生状態を保った代表的な天然林で、山地帯・亜高山帯・高山帯の森林植生の推移等が観察でき学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	京丸国有林の高塚山～岩岳山南部までの稜線沿いの西向き斜面に位置する天然生林である。保護林内は、胸高直径30～50cm程度のモミ、ツガ、ハリモミ、ブナ、ヒメシャラ等を主体とした天然性林が広がる。林床植生はシカ害により乏しく、草本層～低木層がほとんどないか、アセビやシキミが優占しているだけの状態にある。保護対象種のシロヤシオ、アカヤシオは保護林全域にみられ、低木層から亜高木層にかけて胸高直径10～20cm程度の幹径で生育している。	岩岳山のアカヤシオ・シロヤシオ植物群落保護林は、林内にアカヤシオ・シロヤシオの生育する原生状態を保った群落の保護を目的とした保護林である。①アカヤシオ・シロヤシオの希少な個体を保護対象としていること、⑤稜線沿いといった特殊な立地に生育している個体を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 岩岳山アカヤシオ・シロヤシオ
植物群落保護林	上野橋原のシオジ うえのならば	290.19	北沢一帯のシオジ天然分布の北限及びシオジを中心とする貴重な天然林の維持並びに植物社会の特殊な遷移の生態学的検証のため設定する。	保護林全体に中齢から高齢級のシオジが生育し、林床には低木・稚樹が生育して自然更新の状況も確認され、保護対象であるシオジ群落は、良好な状態で維持されている。保護林内において、ニホンシカの食痕や糞、保護林へ向かう途中でもニホンシカの痕跡が多数見られたが、植生に強い影響を及ぼすほどの被害はない。高木層は高さ18～30m、胸高直径27～115cm（最大はシオジ）程度。	上野橋原のシオジ植物群落保護林は、保護林全体に中齢から高齢級のシオジが生育し、当該地域の代表的な溪畔林の保護を目的とした保護林である。また、シオジの分布北限にも当たり、希少性を有した保護林でもある。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存され、溪畔種からなる天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、生物群集保護林への移行要件となる「300ha以上」に近い面積を有していることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、シオジを主体とする溪畔種の生育立地である谷筋のBE型土壌の分布する区域。ハッファ区域は、谷地形を取り巻く斜面とすることを検討。	生物群集保護林 新名称：上野橋原シオジ等溪畔種 生物群集保護林とした場合には個別生物名が入らないが、分布北限にも当たる「シオジ」を強調し、溪畔林を構成する生物群集を保護の対象とするため、『シオジ等溪畔種』を挿入する。
植物群落保護林	梅地のアカマツ林 うめじ	0.83	生育が極めて良好なアカマツ天然林で、この地方では学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	次世代を担うアカマツの低木や稚樹は少ないものの、保護林全体に中齢から高齢級のアカマツが優占し、モミ、ツガ、タカノツメなどが混生し、保護対象であるアカマツ群落は、良好な状態で維持されている。松枯れ防止剤が注入されている（平成22年2月16日注入）。高木層は高さ30～35m、胸高直径50～80cm（最大はアカマツ）程度。	梅地のアカマツ林植物群落保護林は、生育が極めて良好なアカマツ天然林を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、保護林の周辺は、スギやヒノキの植林地となっており、本保護林と同様の林相は周辺には存在していないため、保護林範囲の拡大も不可である。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	大影ミヤマツチトリモチ おおかげ	2.12	分布上稀産種のミヤマツチトリモチの自生地で学術研究上の検証として貴重なため設定する。	保護林は沢沿いの斜面地に設定されていて、胸高直径20～30cm程度のイヌブナや、ミヤマツチトリモチの奇主であるカエデ類を主体とする林が広がっている。ミヤマツチトリモチの発生時期に合わせて過年度設定の調査プロット周辺+100m程度の調査範囲を探索したが、調査時期が適切であったにも関わらず、ミヤマツチトリモチの確認には至らなかった。このため、本保護林の保護対象種であるミヤマツチトリモチの生育状態は不明である。	大影ミヤマツチトリモチ植物群落保護林は、分布上稀産なミヤマツチトリモチの生育地を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、現時点でミヤマツチトリモチの生育状態は不明である。このため、保留扱いとし、今後の取扱いについて、現況調査を行うことなどにより、保護林として存続するのか、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図るのか検討することとする。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	大佐飛山地 おおさびさんち	8,152.35	当該植物群落保護林の核をなす大佐飛山地周辺は、気候的には日本海側と太平洋側の推移地帯にあり、植生的に太平洋側亜高山帯を代表するコメツガ林が広く分布し、チシマザサ、クマイザサを林床に伴うオオシラビソ林やブナ林が発達している。一方で、高山性のハイマツが標高1,700m付近から出現することや、ミヤマナラの分布の南東限となっていること、亜高山性植生の著しい下降現象がみられることなど、冬季の季節風による雪庇の発達をもたらす特異な植生の分布に特徴が見られ、これらの亜高山帯植生を保護するために設定する。	本保護林を含む当該地域の森林植生の特徴は次の通りである。 ①大佐飛山付近は、気候的に日本海側と太平洋側の推移地帯と言われている。植生的にも太平洋側亜高山帯を代表するコメツガ林が広く存在し、一方で、日本海側を特徴づけるオオシラビソ林やブナ林が発達し、チシマザサ、クマイザサなどが林床植生として繁茂している。また、屋根地形に多いアスナロ林の存在も推移地帯であることを支持している。②高山性のハイマツが標高1,700m付近から出現し、コメツガ、ダケカンバ、ウラジロモミ、ヤハズハンノキ、オガラバナなど、亜高山帯植物が単木的に標高1,000m付近から出現するなど垂直分布の著しい下降現象が見られる(林野庁2008、「平成20年度 緑の回廊設定にかかわる基礎資料収集に係る調査業務報告書」)。保護林内は、ブナやダケカンバが多く見られ、林床には、チシマザサやクマイザサが繁茂。環境省植生図によると、尾根筋はオオシラビソ群集となっているが、踏査範囲内にオオシラビソは見られず、針葉樹はウラジロモミやツガがわずかに見られる程度である。日留賀岳方面は、胸高直径30～90cmのブナが多く、ミスナラやダケカンバ、ウラジロモミが混生し、尾根地形の一部にアスナロ群落が見られる。黒滝山方面は、胸高直径30～60cmのダケカンバが多く、ブナやミスナラ、ツガが混生している。	大佐飛山地植物群落保護林は、気候的には日本海側と太平洋側の推移地帯にあり、植生的に太平洋側亜高山帯を代表するコメツガ林が広く分布し、チシマザサ、クマイザサを林床に伴うオオシラビソ林やブナ林が発達している。一方で、高山性のハイマツが標高1,700m付近から出現することや、ミヤマナラの分布の南東限となっていること、亜高山性植生の著しい下降現象がみられることなど、冬季の季節風による雪庇の発達をもたらす特異な植生の分布に特徴が見られる。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、標高1,700m付近から出現する高山性のハイマツ、分布の南東限となっているミヤマナラ、著しい下降現象がみられる亜高山性植生など、冬季の季節風による雪庇の発達をもたらす特異な植生の分布区域とする。保護林外縁部の稜線上には、高山帯低木群落、亜高山帯自然低木群落が分布していることから、保護林外にハッファ区域を設定することを検討する。	生物群集保護林 新名称：大佐飛山地

■【既設】植物群落保護林				3/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	大平モミ おおだいら	1.57	モミを主とするこの天然林は、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に位置している。植物の森林帯を知る上で、大変貴重であり、これを保護するため設定する。	胸高直径30~60cm程度のモミが優占している。虫害を受けた枯損個体が数本見受けられたが、進行中の個体はなく、前回調査時と比較して、大きな変化は確認されない。	大平モミ植物群落保護林、高尾山モミ植物群落保護林ともに、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に生育している貴重な群落である。両保護林とも高尾山の山麓に成立しているものであり、群落としての資質は同じものと考えられる。このように、両保護林は、②分布の上限に位置する個体群であり、両群落を合わせて飛び地指定することとし、希少個体群保護林へ再編する。【別添資料参照】 ■今後の検討課題：①飛び地の一体的な管理を検討する。	希少個体群保護林 新名称：高尾山冷温帯下部モミ 分布限界域のモミであることを強調するため、「冷温帯下部」を挿入する。
植物群落保護林	高尾山モミ たかおさん	3.28	モミを主とするこの天然林は、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に位置している。植物の森林帯を知る上で、大変貴重であり、これを保護するため設定する。	胸高直径30~60cm程度のモミが優占し、他にシラカシヤコナラが亜高木に優占している。成木の数は少ないが、稚樹や幼樹は尾根上に多数生育している。保護林プロットでは、毎木対象のモミは0本（前回1本あったのが虫害により枯損）であるが、下層植生に、モミが20本程度生育している。森林生態系プロットでは、胸高直径30~40cm、高さ16~20mのモミが優占して生育している。しかし、下層植生にモミは見られない。シカの痕跡は見当たらない。虫害は、樹皮に噛み痕があったり、フラスが落ちていたりするので、カミキリムシカキクムシが原因のようである。	大塚山ブナ植物群落保護林は、会津地域におけるブナ天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしてはいるものの、周囲にも広く分布するブナ群落の一分であり、保護林としての希少性がそれほど高くはないと考えられる。このため、保護林の設定をせず、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】 ■今後の検討課題：周囲が緑の回廊に囲まれていることから、緑の回廊への編入を検討する。	廃止
植物群落保護林	大塚山ブナ おおつかやま	154.28	原生的なブナ天然林を保護するため設定する。	保護林周辺部を含め保護林内は、胸高直径30~80cm程度のブナが優占する林となっている。	大平コウヤマキ植物群落保護林は、弘法大師にまつわる伝承があるコウヤマキの大木を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。一方、静岡県の天然記念物にも指定されているため、引き続き担保されることとなる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	大平コウヤマキ おおひら	0.04	弘法大師にまつわる伝承があるコウヤマキの大木で貴重であり、これを保護するため設定する。静岡県天然記念物「大平のコウヤマキ」(S60,11,29)として指定されている(根廻8.75m、樹高17.0m)。	周辺にコウヤマキは生育しておらず、また、コウヤマキの低木・稚樹の生育はみらず、コウヤマキが単木で生育している。前回調査以前から、上半分が落雷により枯損している。当該コウヤマキは、静岡県の天然記念物に指定されている。コウヤマキは通常は雌雄同株であるが、当地のコウヤマキは珍しい雄株である。	大真名子コメツガ植物群落保護林は、原生林に準ずる亜高山帯針葉樹林の保護を目的とした保護林である。①原生林に準ずる亜高山帯針葉樹林の希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：大真名子コメツガ
植物群落保護林	大真名子コメツガ おおまなこ	12.24	原生林に準ずる亜高山性針葉樹林で、学術及び森林施業上の考証として必要なため設定する。	高木層はコメツガが優占しているものの、枯損木も多く見られた。また、各階層ともに亜高山性針葉樹が出現しており、特にオオシラビソやシラビソの幼樹が目立つ。高木層は高さ20m、胸高直径20-65cm（最大はコメツガ）程度。	奥鬼怒植物群落保護林は、オオシラビソ、シラビソ、トウヒ、コメツガなどからなる亜高山帯針葉樹林が広く分布し、日本で最も高標高（標高約2,030m）に位置する鬼怒沼湿原を有している。湿原には、湿原には、イワカガミ、チングルマ、キンコウカ、タテヤマリンドウ、ワタスゲ、ツルコケモモなどがみられ、希少植物も多産する。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保護林の全域が天然林のため、保護林区域の全域をコア区域として位置付ける。周辺が国有林の場合、バッファ区域は、基本的には隣接する小林班とし、民有林の場合は、利用の可能性はあるが、隣接する区域をバッファとみなすことを基本に検討する。	生物群集保護林 新名称：奥鬼怒
植物群落保護林	奥鬼怒 おくぬ	2,585.35	原生林的な亜高山帯植生の森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なため設定する。	本保護林は、亜高山帯に位置し、保護林内にはオオシラビソ、シラビソ、トウヒ、コメツガなどからなる亜高山帯針葉樹林が広く分布する。また、ダケカンバ、ミヤマハンノキ、ミヤマナラ、ウダイカンバなどの落葉広葉樹林もみられる。保護林の下部ではウラジロモミ、アスナロ、キタゴヨウ、クロベ、ブナ、ミスナラなどからなる自然林が一部に見られる。鬼怒沼湿原は日本で最も高標高（標高約2,030m）に位置する湿原で、面積は13.4haである。ヤチスゲやヌマガヤが優占し、ミスゴケ類も豊富である。湿原には、イワカガミ、チングルマ、キンコウカ、タテヤマリンドウ、ワタスゲ、ツルコケモモなどがみられ、希少植物も多産する。湿原内には池塘が見られ、湿原周辺では矮小化したクロベやアスナロが生育する。高山植物群落は、南に位置する日光地域との境界部の稜線上にみられる。	雄国沼湿原植物群落保護林は、稀産種の多い高層湿原の保護を目的とした保護林である。⑤高層湿原を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：雄国沼湿原
植物群落保護林	雄国沼湿原 おぐにぬま	174.13	湿原植生を保護するため設定する。	本保護林は、中心に雄国沼が位置し、沼周辺には良く発達した高層湿原が成立する。主たる樹種はブナ、ミスナラ等19~101年生の天然生広葉樹林。保護林全域が第1種特別保護地域に設定されている。湿原は再生複合体の見られるよく発達した高層湿原で、ホロムイイチゴ、ヒオウギアヤメなどを多産し、当該地域では特に希少種が多い。国指定天然記念物で、湿原植物観賞のため木道が設置してある。	和尚山温帯性群落保護林は、低標高地に下降しているブナなどの温帯性樹種により構成された天然林の保護を目的とした保護林である。②低標高地に下降しているブナなどの温帯林を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：和尚山暖温帯上部ブナ 暖温帯に遺存しているブナであることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。
植物群落保護林	和尚山温帯性 おしょうやま	23.17	ブナ、ミスナラを主とした代表的な温帯性原生林で、この地方では学術上貴重な森林でありこれを保護するため設定した。	和尚山国有林の山頂~山腹にかけて分布する天然生林である。保護林内は、ブナ、ミスナラ、コナラ、クリなどが優占する林相にある。高木層は高さ23m、胸高直径15-105cm（最大はミスナラ）程度。		

■【既設】植物群落保護林				4/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	小田代湿原 おだしろ	69.28	原生林に準ずべき林相を有する森林及び高山植物の生育する区域で、学術及び森林施業上の考証として必要なもの。湿原植生及び鳥獣を保護するため設定する。	保護林内は、中央に湿原が広がり、湿原周囲の比較的乾燥した箇所にはイブキトナノオ、タテヤマツグ、ニッコウザサなどが優占する草原が分布し、さらに外側はホザキシモツクが優占する草原に低木のズミが散在しており、林内はカラマツ、ミスナラ、シラカンバの優占する林分にある。	小田代湿原植物群落保護林は、稀産種の多い湿原植生の保護を目的とした保護林である。⑤ホザキシモツク群落など、湿原を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：小田代湿原
植物群落保護林	オツボギのホソバシヤクナゲ	1.23	遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの群生地で学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径30～50cm程度のスギ・ヒノキの人工林が広がっており、ホソバシヤクナゲは草本層から低木層に生育している。保護林の南西側に接する送電線下の一部区域には、手違いによりホソバシヤクナゲごと伐採が行われた箇所があり（平成15、16年頃）、現在補植が行われている。保護林内の補植地に接する林縁部では、ホソバシヤクナゲが被度高く見られるが、林内は、スギ・ヒノキが樹冠を覆い、ホソバシヤクナゲの生育は少ない状況にある。また、生育個体には、梢端枯損木や枯損もみられ、開花結実は見られない。	オツボギのホソバシヤクナゲ植物群落保護林は、遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの希少な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①周辺部のホソバシヤクナゲ生育地を保護林区域に組み込むことを検討。②森林施業の実施。保護林区域内のホソバシヤクナゲの生育が不良なため、スギ・ヒノキの間伐により林内に光を取り込み、ホソバシヤクナゲの生育を促すための森林施業を実施中。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：オツボギのホソバシヤクナゲ カタカナが続くため、「の」を挿入する。
植物群落保護林	加治川フナ・ユキツバキ かじがわ	73.70	当該区域におけるフナ、ユキツバキの群落は加治川流域における分布の上限であり、この植物群落の保護を図るため設定する。	保護林内においてユキツバキは、保護林全体には分布しておらず、一部の区域に分布している。保護対象種のユキツバキは、プロット2が設置された付近の林分において、健全な状態で生育している。なお、指定を解除した近隣の胎内山ミスナラ林木遺産資源保存林内においては、上層のミスナラの枯死・倒木化によって林床の照度が上がり、林内に生育していたユキツバキが旺盛に生育している。	加治川フナ・ユキツバキ植物群落保護林は、加治川流域におけるユキツバキの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしてはいるものの、ユキツバキは広域分布種であり、周辺にも広く分布するユキツバキの林分であり、希少性が低いことから、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。	廃止
植物群落保護林	迦葉山天然ヒバ かしょうざん	2.44	原生林に準ずべき林相を有する森林で（天然生アスナロ：ヒバの伏条更新が良好）学術及び森林施業上の考証として貴重のため設定する。	保護林内の斜面中腹に帯状にアスナロが分布している。ほぼ純林で、林内は暗く、下層植生は乏しい。胸高直径は、20～40cmで、若齢～中齢級のアスナロからなる。大径木の古い伐採跡（針葉樹）があり、本アスナロ群落は、伐採後の一斉林と思われる。胸高直径60cm程度のウダイカンバも生育。稚樹や幼樹は生育していないが、亜高木クラスの若い木は少数見られる。アスナロ林に隣接する広葉樹林内は、下層植生が発達しており、シカ害はほとんどない。	迦葉山天然ヒバ植物群落保護林は、原生林に準ずる林相を有したアスナロ群落の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①伏条更新が良好なアスナロの希少な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：保護林区域の検討。保護林の東側および南側に接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	上佐野 かみさの	19.82	上佐野地域を代表する高齢級天然林を保護するため設定する。	保護林内は、中齢から高齢級のスギ、フナ、イヌフナなどが優占する群落分布し、大径木の古い枯死木が僅かに見られる。保護林内でスギの精英樹（精英樹とは、同じ土壌条件の地域に生育する同種・同齢木に比べて、形質が特に優れた成長をしている樹木をいう）が保護されている。	上佐野植物群落保護林は、上佐野地域を代表する高齢級の天然林の保護を目的とした保護林である。①地域の天然林を構成する高齢級の希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：上佐野スギ・フナ・イヌフナ
植物群落保護林	茅野エドヒガンザクラ かやの	0.01	この地域のサクラでは最大のものであり、これを保護するため設定する。天城湯ヶ島町天然記念物「茅野のエドヒガンザクラ」（S58.2.28）として指定されている。	本保護林は、450年生のエドヒガンの大木。対象木はエドヒガン1本。伊豆市の説明看板から推定樹齢は250年で、山中に野生する早春の早咲きザクラとしては当地方では最大。保護林周辺はスギ植林とウラジロガシ、シロダモ等のカシ林。後継樹はない。	茅野エドヒガンザクラ植物群落保護林は、地域随一の大木であるエドヒガンザクラを保護するために設定しているが、5ha未満であり、機能類型を希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。一方、天城湯ヶ島町の天然記念物にも指定されているため、引き続き担保されることとなる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	唐沢ヤシオツツジ からさわ	57.08	原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なもの。フナ林下のヤシオツツジ群生地を保護するため設定する。	保護林内は、コメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹の混交比が高い林分が広範囲に分布し、フナ、ミスナラ等の落葉広葉樹が優占する林分は中心部の尾根沿いに一部みられる。ヤシオツツジ（アカヤシオ、シロヤシオ）は林下に散生している。高木層は高さ22m、胸高直径25-60cm（最大はウラジロモミ）程度。	唐沢ヤシオツツジ植物群落保護林は、低標高地に降下しているコメツガを含み、林下にシロヤシオ、アカヤシオの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。②低標高地に降下しているコメツガ、⑤痩稜地に生育するシロヤシオ、アカヤシオなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：唐沢冷温帯コメツガ・シロヤシオ・アカヤシオ 冷温帯に降下しているコメツガであることを強調するため、「冷温帯」を挿入する。
植物群落保護林	川上の冷温帯性 かわかみ	54.03	原生状態を保った代表的な天然林で、山地帯・亜高山帯・高山帯の森林植生の推移等が観察でき学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	川上国有林の蕎麦粒山の山頂から南西斜面に位置する天然林である。中央部の標高は約1400m。保護林内は、ツガ、ウラジロモミ、ハリモミ、フナ、ミスナラ、ダケカンバ等（胸高直径30～110cm）が混生し、ツガなどの針葉樹を主体とした樹林に、ダケカンバやフナなどの落葉樹が優占する林が所々に分布している。尾根部の針葉樹の枯損・枯死が目立つ。尾根に沿ってニホンシカによる食害が特に見られたが、樹木へのニホンシカの剥皮・角砥跡はあまり見られない。	川上の冷温帯性植物群落保護林は、中間温帯上部に位置する天然林で、ハリモミを交えたツガ群落に特徴が見られる保護林である。①地域の天然林を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：川上ツガ・ハリモミ

■【既設】植物群落保護林				5/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	皮子沢モミ かわこざわ	11.26	モミを主とするこの天然林は、暖温帯上部から冷温帯下部に位置し、軽石溶岩流上に生じたもので植生遷移上貴重であり、これを保護するため設定する。	軽石溶岩流上に生じたモミを主とした天然林。モミやカエデ類、ヒメジャラなどの落葉広葉樹が混交する天然林で、モミやその他の落葉広葉樹は胸高直径100cmを超えるものが多い（静岡県）。保護林内のほぼ全域が同一林相のモミ群落。成木の生育は良好で実生は多い。高木層は高さ20～38m、胸高直径40～139cm（最大はモミ）程度。	皮子沢モミ植物群落保護林は、3,000年前の噴火による軽石溶岩流上に生じたモミを主とした天然林の保護を目的とした保護林である。⑤特殊な立地に成立しているモミ群落を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：皮子沢モミ
植物群落保護林	寒天お礼杉 かんでん	0.42	伊豆天城山が徳川幕府の天領として、韮山代官が管理していた頃（宝暦時代）地元村民が雑木や下草採取のお礼としてスギを植栽したもので「お礼杉」と呼ばれている。天城山におけるスギの育成状態を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	本保護林は、保護林台帳から、江戸時代に植栽されたスギ。対象木の活力度は良好。後継樹なし。周辺はスギ植林。保護林の面積は0.42haあるが、お礼杉は3本。	寒天お礼杉植物群落保護林は、江戸時代に植栽されたスギの樹群を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	寒天モミ かんでん	11.29	モミを主とし、ミスギ等の落葉広葉樹と混交するこの天然林は、暖温帯北部から冷温帯南部に位置し、植生遷移上貴重であり、これを保護するため設定する。	モミを主とし、ミスギ等の落葉広葉樹が混交している天然林。上層木はモミを主木とし、ツガ、ミスギ、クマシデなどから成る。林内にシキミ、ヤブツバキなどの暖帯要素の種が生育する。林床にはスズクゲとアマギザサが優占するが、ササのない所ではヤマシオウなど多くの草本が生育する（静岡県）。モミの成木の生育は良好。実生があり更新が認められる。高木層は高さ20～31m、胸高直径42～112cm（最大はモミ）程度。	寒天モミ植物群落保護林は、高齢から老齢のモミの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。①高齢から老齢のモミなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：寒天モミ
植物群落保護林	観音山の森林 かんのんやま	4.60	旧幕時代の植栽と推定される高齢のスギ林に広葉樹が侵入して天然林的な林相を呈しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	観音山国有林の、観音山の稜線沿いの南向き斜面に位置する天然生林である。保護林内には、スギ、ヒノキ、モミ等を主とした天然生林が広がっている。保護林内は、スギ（胸高直径80～90cm）が優占する林相にある。 なお、保護林の稜線から観音山に続く稜線部には蛇紋岩が分布しており、蛇紋岩変形植物として当該地域に固有かつ希少な植物である、シブカワツツジ、シブカワシロギク、カキノハグサなどの分布が認められている。	観音山の森林植物群落保護林は、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていないが、旧幕時代の植栽と推定される高齢のスギ林に広葉樹が侵入して天然林的な林相を呈し、この地域の自然林として、歴史的に位置ついた保護林である。また、観音山へと続く稜線部には、蛇紋岩変形植物として知られる希少な植物が分布している。このため、①200年生のスギ林として長期間にわたって管理されてきた希少な個体群であり、⑤稜線部の蛇紋岩地帯には、シブカワツツジ等の固有かつ希少な植物が生育する低木群落が見られるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の外側に広がる蛇紋岩地質にシブカワツツジ等の固有かつ希少な蛇紋岩変形植物が生育していることから、その区域を含めて保護できるように保護林区域の拡張を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	京丸山のシロヤシオ・キョウマルシャクナゲ きょうまるやま	37.49	キョウマルシャクナゲは当地を基準標本の産地とする貴重な植物であり、当地域に群生するシロヤシオとともに学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	門府国有林の京丸山（標高1469m）～灰縄山の稜線に位置する、天然生林である。保護林内には、モミ、ツガ、ヒメジャラを主とする天然生林が広がっている。保護林内の東側は胸高直径20～80cm程度のブナが優占して低木層から草本層にシロヤシオがみられ、西北側は胸高直径30～50cm程度のツガが優占して低木層～草本層にキョウマルシャクナゲがみられる。キョウマルシャクナゲの分布は、保護林内の北西側の範囲に限られる。保護林内はシカによる食害が著しく、ササ丈は低く抑えられ、低木層は不嗜好性植物のアセビが広く優占している。	京丸山のシロヤシオ・キョウマルシャクナゲ植物群落保護林は、当地域を基準産地とするキョウマルシャクナゲや背稜地に生育するシロヤシオが生育する天然林の保護を目的とした保護林である。①当地域を基準産地とする希少なキョウマルシャクナゲを保護対象としていること、⑤背稜地といった特殊な立地に生育するツツジ類など、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：京丸山キョウマルシャクナゲ
植物群落保護林	黒斑山天然カラマツ くろふやま	75.80	原生林に準ずべき林相を有する森林で、カラマツの学術及び森林施業上の考証として貴重なため設定する。	黒斑山（くろふやま）の火山噴出物上に成立したカラマツの純林。保護林内は、ほぼカラマツの純林となっているが、沢沿いや急傾斜地ではシラビソやコメツガが小さい群落をつくっている。高木層の高さは18～30mで、カラマツが優占する。高木層を形成するカラマツの胸高直径は30～50cm程度。保護対象群落であるカラマツ群落は、環境圧の厳しい環境に成立しているためやや疎で、樹高も矮性化の傾向にあるが、胸高直径が50～60cm程度あり、当該地域の土地的・気候的極相林の様相を呈している。	黒斑山天然カラマツ植物群落保護林は、火山噴出物上に成立したカラマツの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。⑤火山噴出物上で土的極相林を形成しているカラマツなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：黒斑山カラマツ
植物群落保護林	光徳シラカンバ こうとく	1.54	森林施業上の考証として必要。シラカンバ-ミヤコザサ群落を保護するため設定する。	三岳（1944m）山麓の標高約1480m前後に位置する。保護林内は自生した二次林でシラカンバの他、ミスナラ、ウラシロモミが混交している。保護林内は、ミスナラ（胸高直径30～50cm）が優占し、その中にシラカンバ（胸高直径20～30）が小群状や単木状に生育している。保護対象種であるシラカンバは、先駆性樹種であるため枯損が進行し、衰退傾向が読み取れる。	光徳シラカンバ植物群落保護林は、シラカンバ群落の保護を目的とした保護林であるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、本シラカンバ群落は、シラカンバが陽樹のため既に衰退が認められる。このため、保護林の拡張による存続を検討せず、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止

■【既設】植物群落保護林				6/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	光徳ハルニシ こうとく	3.69	ハルニシ群生地を保護するため設定する。	逆川の土砂が堆積した氾濫原にハルニシの純林が分布している。高木層は高さ32m、胸高直径20-90cm程度（最大はハルニシ）。	光徳ハルニシ植物群落保護林は、ハルニシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①大径木を含むハルニシの純林からなり学術的にも貴重な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の東側、南側、および、西側に接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	光徳ミスナラ こうとく	24.28	高齢級のミスナラ純林で学術及び森林施業上の考証として必要。ミスナラ・ミヤコザサ群落を保護するため設定する。	東側と西側とで林相が異なっている。東側は、ミスナラの中齢木（胸高直径30～50cm）が優占する林で、カラマツ（20～40cm）が混生している。西側は、ミスナラの高齢木（30～100cm）が優占する林で、ウラジロモミ（20～30cm）が混生している。保護対象であるミスナラの高齢木は、保護林の西側の林分に単木状に分布している。高直径20～30cm級のミスナラは、萌芽して株立しているものが多い。	光徳ミスナラ植物群落保護林は、火山噴出物上で土壌が薄く、ブナの入り込めない立地に成立した、ミスナラの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。⑤火山噴出物上で土地的極相林を形成しているミスナラなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：光徳ミスナラ
植物群落保護林	猿ヶ城岩オオフジシダ さるがじょういわ	5.25	北限分布のオオフジシダをはじめとする、北地には希少な暖地性シダの群生地であり、これらシダ群落の保護を図るために設定する。	保護対象種であるオオフジシダは、保護林南側の東の隅の所に生育。低木林下の湿った岩の下部の、岩の隙間に群生。保護林外ではあるが、保護林に隣接する遊歩道沿いの方が多く生育。北側の保護林内においても、湿潤な岩場のある場所でオオフジシダが確認される可能性がある。生育を確認したオオフジシダは、分布北限のためか、本来の生育地のものよりも矮性化したものが多い。保護林内におけるオオフジシダの生育地は、保護林外に連続して広がっており、むしろ、生育地の中心は、より湿潤な環境条件にある保護林外の河川へと繋がる凹型斜面地である。また、当該地域における暖地系シダ類としては、オオフジシダの他、コバノイシカグマ、ウスヒメワラビの生育が知られている。本調査では、これらの本保護林を特徴づける暖地系シダ類の生育は確認されていない。このため、今後の調査においては、確認されているオオフジシダの生育地の監視に合わせ、保護林全域を対象とした植物相調査を実施し、他の暖地系シダ類の生育分布状況の把握を実施し、生育状況の評価を行うことが必要である。	猿ヶ城岩オオフジシダ植物群落保護林は、北限分布のオオフジシダをはじめとする、北地には希少な暖地性シダの群生地の保護を目的とした保護林である。②分布北限に当たるオオフジシダなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。オオフジシダの生育地は、より湿潤な環境条件にある保護林外の河川へと繋がる凹型斜面地であり、この区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：猿ヶ城岩オオフジシダ
植物群落保護林	猿ヶ城シャクナゲ さるがじょう	28.4	この地方では、珍しい天然広葉樹林内にアスマジャクナゲが生育しており、遺跡一帯の風致を保つため設定する。また、茨城百景となっている。	保護林内にはブナ、クリ、コナラ等により構成される天然林が広がる。保護対象種のアスマジャクナゲは、類似の地形・林相を擁する場所でも、生育している地点と生育していない地点がある。	猿ヶ城シャクナゲ植物群落保護林は、この地域では珍しいアスマジャクナゲが生育する落葉広葉樹林の保護を目的とした保護林である。この地域では分布上希少なアスマジャクナゲの個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：猿ヶ城シャクナゲ
植物群落保護林	尚仁沢ブナ・イヌブナ等 しょうじんざわ	616.34	本保護林には、太平洋側気候域に残された原生的なブナ・イヌブナ林が分布し、学術的に極めて貴重である。このため、ブナ・イヌブナ天然林等を保護するために設定する。	保護林内の多くは、ミスナラ群落が占め、保護対象群落であるブナ・イヌブナ林は、天然記念物に指定された『長期森林動態調査区』に認められる程度であると思われる。このように、比較的広大な面積の保護林であるが、保護対象群落であるイヌブナ林の分布は、保護林下部の一部の区域に限られるようである。環境省植生図によるアブラツツジーイヌブナ群集の表示範囲は、比較的緩やかな地形条件を示す範囲にあり、イヌブナ本来の生育立地である急峻な地形とは違っているため、保護林上部の形条件がより急峻な区域にも布している可能性があると思われるため、次回の調査においては、踏査範囲を広げ、イヌブナ群落の分布状況の全体像を把握する必要がある。	尚仁沢ブナ・イヌブナ等植物群落保護林は、太平洋側気候域に残された原生的なブナ・イヌブナ林を含む保護林である。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。 ■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、ブナ・イヌブナ群落が分布する区域。これらの群落分布区域が保護林境界部に接する場合は、保護林外の国有林をバッファ区域として再編後の保護林に編入し、保護林区域の拡張を図ることを検討。	生物群集保護林 新名称：尚仁沢
植物群落保護林	浄蓮暖温帯性 じょうれん	37.35	この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径50～100cm程度のスタジイ、シラカシ、アラカシなどの高齢木が優占し、ヤマザクラ、アカマツなどの老齢木が混生する林となっている。ニホンジカによる林床植生の食害が著しいが、カシ類を主体に常緑樹が各階層に生育しており、実生が多く、更新している様子がうかがえる。保護林内に生育しているアカマツの大径木については、マツ枯れの防除対策が実施されている。	浄蓮暖温帯性植物群落保護林は、この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林の保護を目的とした保護林である。②常緑広葉樹林の分布域の上限にあたる天然林で、この地域では少ないウラジロガシやアカガシなどの個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：浄蓮暖温帯上部ウラジロガシ・アカガシ 暖温帯上部に成立している常緑広葉樹林であることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。

■【既設】植物群落保護林				7/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	浄蓮ハイコモチシダ じょうれん	0.99	このシダは、暖地性の日本固有のものであり植物分布上最北限に位置し貴重であり、これを保護するため設定する。静岡県天然記念物「浄蓮のハイコモチシダ群落」(S39,10,6)として指定されている。	浄蓮の滝を挟んだ両岩壁に保護対象のハイコモチシダ群落が成立している。右岸側は垂直壁に下垂するように分布し(10×30m内に4・4程度の被度・群度)、左岸側は、垂直壁の2箇所に1×1m程度と2×2m程度の小群落が、川沿いの斜面に、15×20m内に5・5程度、5×5内に5・5程度の被度・群度を有する比較的大きな群落が分布している。静岡県の天然記念物に指定され、採取を禁じている。周辺はシイ、カシ、スギ植林、ケヤキ等の溪畔林。	浄蓮ハイコモチシダ植物群落保護林は、分布の北限地のハイコモチシダ群落の保護を目的とした保護林である。分布上極めて貴重ではあるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。一方、静岡県の天然記念物にも指定されているため、引き続き担保されることとなる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	しらぬた大杉	0.81	このスギは、枝ぶりから「お化けスギ」とも呼ばれ、東伊豆町随一の大木であり、これを保護するため、周囲の造林地も含めて設定する。東伊豆町天然記念物「シラヌタ大杉」(S56,3,25)として指定されている(根廻り12m、樹高45m)。	東伊豆町天然記念物「シラヌタ大杉」として指定されている、スギの大木。根回り860cm、樹高38m(静岡県)。対象木の活力度は中程度。後継樹なし。周辺は樹齢30年生のヒノキ植林。	しらぬた大杉植物群落保護林は、東伊豆町随一の大木であるスギを保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。一方、東伊豆町の天然記念物にも指定されているため、引き続き担保されることとなる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	しらぬたの池モミ・スギ	39.96	モミ、スギ等の針葉樹とケヤキ等の広葉樹が混交するこの天然林は、原生的状態を保ち、モリアオガエルの生息地として知られるシラヌタの池の生物相を保全している貴重なものであり、これを保護するため設定する。	モミ、スギを主とする天然林。静岡県天然記念物「シラヌタの池とその周辺の生物相」に指定されている。本保護林内には主にモミ林が分布する。しらぬたの池周辺にもモミ・スギ群落が見られる。モリアオガエルが産卵する水際の樹木の樹形は、池の上部に枝が張り出す形となっている。高木層は高さ21~45m、胸高直径60~199cm(最大はモミ)程度。上層を構成するモミ、スギは現段階では健全に生育しているが、高齢から老齢木が多いことに加え、既に枯損しているものが見受けられる。保護林内全体のモミの枯損状況については本調査では未実施のため不明である。	しらぬたの池モミ・スギは、中間温帯で極相をなす、モミ・スギの高齢から老齢木により構成された天然林の保護と、モリアオガエルの生息環境の保全を目的とした保護林である。中間温帯を形成する天然林で、①老齢木にまで成長したモミやスギなどの個体群を保護対象としていること、①モリアオガエルの生息地として知られるシラヌタの池の希少な生物相を保全していること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：しらぬたの池モミ・スギ
植物群落保護林	守門ブナ すもん	698.89	守門岳一帯の豪雪地帯に生育するブナを主体とした優良な天然生広葉樹林を保護するため設定する。	本保護林は、ブナ、ミズナラを主体とする林齢121年生以上の優良な天然性広葉樹林である。	守門ブナ植物群落保護林、守門岳ブナ植物群落保護林ともに、守門岳一帯の豪雪地帯に成立しているブナ群落の保護を目的とした保護林である。環境条件の厳しい斜面上部から尾根部、急傾斜地には、風雪地特有の矮性、低木型のブナ林が成立し、傾斜が緩やかで土壌が厚く堆積した立地のブナ林とは様相を異にしている。これらの保護林は隣接して存在し、同一の植生タイプにあることから、一体的に管理することが妥当と考えられる。このため保護林を統合し、豪雪地帯特有のブナ林として地域固有の生物群集がまとまりを持って存在し、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。	生物群集保護林 新名称：守門岳
植物群落保護林	守門岳ブナ すもんだけ	1,079.37	守門岳一帯の豪雪地帯に生育するブナを主体とした優良な天然生広葉樹林を保護するため設定する。	本保護林は、林齢121年生以上のブナを主体としてヒメコマツが点生する優良な天然性林が広がっている。標高1,300mの上部がミズナラ、マルバマンサクなどの自然低木群落で、それよりも下部がブナ林である。ブナ林は傾斜の緩やかなどころでは樹高が10mを超え、傾斜の強いところでは、厳しい環境下の中で継続して形成されている風雪地特有の矮性、低木型のブナ林が成立している。	■今後の検討課題：①地帯区分の検討。本生物群集保護林は、多様な形態を示すブナ林の存在に特徴があり、保護林外縁部の稜線沿いも多型ブナ林の1タイプである矮性低木林が分布している。このため、コア区域は、保護林外縁部の稜線部を含めた、保護林の区域とし、バッファ区域を保護林外に設定することを検討する。【別添資料参照】	
植物群落保護林	諏訪森 すわのもり	10.79	寛永年間に植栽された人工アカマツ林を保護するため設定する。	保護林内は、高木層にアカマツが優占する天然性林が広がる。富士山世界文化遺産の登録に向け、林野庁も共同推薦省庁として準備を進めており、その構成資産である吉田口登山道の一部を諏訪森アカマツ林が担っている。別途、森林生態、樹病・昆虫生態、学術文化などに関する有識者等から構成される検討会のもと管理指針が作成中であり、4ha区域の毎木調査も実施されている。護林内は胸高直径60~80cm程度のアカマツ林。	諏訪森植物群落保護林は、寛永年間に植栽されたアカマツ林の保護を目的とした保護林である。①300年生のアカマツで、地域のシンボルとしても長期間にわたって大切に管理されてきた希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：諏訪森アカマツ
植物群落保護林	戦場ヶ原湿原 ぜんじょうがはらしつげん	174.68	高山植物の生育及び高層湿原植生の代表的湿原で、学術上の考証として必要なため設定する。	保護林内の湿原部はヨシの優占する低層湿原が広がり、湿原周囲はシラカバやカラマツの優占する林相で、沢の流入部はヤマハシノキやズミの優占する林相にある。	戦場ヶ原湿原植物群落保護林は、当該地域を代表する高層湿原の保護を目的とした保護林である。①⑤希少な植物が生育する湿原植生を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：戦場ヶ原湿原
植物群落保護林	大名沢天然ヒノキ だいみょうざわ	1.68	原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なため設定する。	保護林内は、胸高直径60~90cm程度のツガや20~40cm程度のヒノキが生育している。天然ヒノキは、保護林内の東側尾根と西側尾根の急傾斜地に分布している。シカ害が見られ、ほとんどのリュウブヤアブラツツジが樹皮剥ぎ、萌芽枝の食害などの被害を受けている。ヒノキには既に樹皮剥ぎ防止ネットや紐が巻かれており、被害はほとんど受けていない。	大名沢天然ヒノキ植物群落保護林は、原生林に準ずるヒノキ群落の保護を目的とした保護林であるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、周辺は人工林であり、保護林と同様の林相にある林分は分布していない。さらに、保護林は、都道府県自然環境保全地域特別地区内にあり、自然維持タイプの森林として担保されている。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止

■【既設】植物群落保護林				8/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	高原山天然イラモミ たかはらやま	90.89	天然イラモミの北限。原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なため設定する。	保護林内はダケカンバが優占し、ミスナラ、ウラジロモミが散在する林相で、尾根上にイラモミの小群落が散在している。下層植生は、ササが繁茂しており、尾根筋ではシカの食害が、一部衰退しているところが見られる。また、ウラジロモミ、カエデ類、リョウブへの食害（樹皮剥ぎ）が多くみられ、立ち枯れたウラジロモミも散在している。イラモミへの被害は、角研ぎ痕程度で、あまりみられない。高木層は高さ28m、胸高直径37-83cm（最大はイラモミ）程度。	高原山天然イラモミ植物群落保護林は、分布北限のイラモミを含む天然林の保護を目的とした保護林である。②分布北限のイラモミなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：高原山イラモミ
植物群落保護林	滝天然サワラ たき	0.49	天然サワラ林を保護するため設定する。	胸高直径20-40cmのサワラが優占する林相にある。サワラは中齢が多く、密度が高いため、今後も進んでいくと考えられる種内競争による淘汰の段階で、伏状更新等の更新が行われていく可能性もあると考えられる。	滝天然サワラ植物群落保護林は、面積は僅かではあるものの、①当局内で天然サワラの純林が認められる場所は唯一でその希少性は高く評価されるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。周辺に一体的な保全が必要な林分が存在するか確認するとともに、北側に位置する八幡岳周辺冷温帯ブナ・ミスナラ植物群落保護林との一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	茶ノ木平ウラジロモミ ちゃのきだいら	81.43	原生林に準ずる森林で学術及び森林施業上の考証として必要なため設定する。	保護林内は、ウラジロモミが優占している林相にある。高木層は高さ31m、胸高直径20-90cm（最大はウラジロモミ）程度。	茶ノ木平ウラジロモミ植物群落保護林は、ウラジロモミの優占した天然林の保護を目的とした保護林である。①大径木のウラジロモミなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：茶ノ木平ウラジロモミ
植物群落保護林	長九郎シャクナゲ ちょうくろう	2.65	長九郎山頂部にあり、ホンシャクナゲの亜種にあたるキョウマルシャクナゲの群落で貴重なものであり、これを保護するため設定する。	キョウマルシャクナゲは保護林内の尾根部を中心に分布している。キョウマルシャクナゲが多く生育している場所上層はアカガシを主とする常緑広葉樹に覆われており、かなり被圧された状況下に置かれていると考えられる。さらには、林内においても、他の常緑広葉樹と競合しており、林下においては、シカによる食害も見られて、稚樹・実生も少ないのが現状である。このため、次世代を担うキョウマルシャクナゲの生育は停滞しているものと評価される。実生は露岩や朽木上の苔むした場所に限られ、その数は少なく、稚樹はほとんど見られない。山頂の説明看板からは人為的な影響によってシャクナゲが減少しているとの報告が、上層木の被圧やシカによる食害も大きいと考えられる。	長九郎シャクナゲ植物群落保護林は、ホンシャクナゲの亜種にあたるキョウマルシャクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①局内で類を見ない特徴的な保護林であり、学術的にも貴重な保護林であるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。キョウマルシャクナゲの生育立地である尾根部に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②維持管理対策の必要性を検討。キョウマルシャクナゲを一体的に管理することが課題である。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	黄楊の峯ツゲ群生地 つげのみね	18.85	標高1,000mの風衝地のブナとススタケ等を主とする天然の疎林の中にツゲが群生している。天城山では、当該地に限られて自生する貴重なものであり、これを保護するため設定する。	本保護林は、ブナとススタケ等を主とする天然林の疎林の中にツゲが群生している。保護林内にはブナ林が広く分布するが、下層にツゲが生育する林分は保護林の北端に限られる。ツゲの生育は良好。後継樹あり。ツゲの生育場所は、尾根を境に北側の民有林内に及んでいる。稜線の一部ではブナの枯損が進行し、シカの食害も相まって裸地化が進行している。本保護林に広く分布するブナ林は、雲霧林の様相を示し、生育しているブナなどの落葉樹の樹幹には、マツノハマネングサやオオクボシダなどの着生植物も見られ、特徴的なブナ林となっている。	黄楊の峯ツゲ群生地植物群落保護林は、ツゲの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。①天城山では、当該地に限り自生する貴重なツゲの個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。ツゲの生育地は保護林の北部に限られ、保護林外の民有林にも分布が広がっている状況にある。このため、同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：黄楊の峯ツゲ
植物群落保護林	天丸山天然ヒノキ てんまるやま	119.35	ヒノキ、シオジ、イヌブナ等を中心とする天然林、及び、ハコネコメツツジの貴重な群生地の植物学的考証のため設定する。	次世代を担うヒノキの低木や稚樹は少ないものの、保護林全体に中齢から高齢級のヒノキが生育し、イヌブナが混生する林相にある。高木層は高さ18~31m、胸高直径30-105cm（最大はウラジロモミ）程度。ハコネコメツツジ群落は、天丸山山頂の岩角地に成立している。	天丸山天然ヒノキ植物群落保護林は、岩角地に成立しているヒノキ群落やハコネコメツツジ群落の保護を目的とした保護林である。⑤岩角地といった特殊な立地に成立している希少な土地的極相林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：天丸山ヒノキ・ハコネコメツツジ

■【既設】植物群落保護林				9/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	遠永シオジ とおなが	0.87	シオジの北限として学術及び森林施業上の考証のため設定する。	主たる樹種はシオジ、その他広葉樹である。周辺には、クリーミズナラ群落、アカマツ植林、スギ・ヒノキ・サワラ植林等が分布する。護林内は、岩角地が多く、沢沿いにシオジ林が形成されている。シオジの胸高直径は20~100cm、高さ20~35m程度である。下層には、ミヤマクマワラビが見られ、典型的なミヤマクマワラビシオジ群集が形成されている。林床植生の植生率は低く、ニホンシカによる食圧が高まっている可能性がある（食害は通常は食さないオシダにも及んでいる）。	遠永シオジ植物群落保護林は、北限のシオジ群落の保護を目的とした保護林であるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、生育しているシオジの個体数が少なく、周辺は人工林やクリーミズナラ群落であり、保護林と同様の林相にある林分は分布していない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	流石山・大峠風衝地 ながれいしやま・おおとうげ	97.31	流石山・大峠周辺は、冬季の季節風による雪庇の発達もたらす特異な植生が分布し、全国的に見ると分布のほぼ南東端にあたるミヤマナラ群落が発達している。ミヤマナラ群落が発達する地形と、ハイマツ群落、ニッコウキスゲなどが優占した雪田草原などが地形に応じて分布域を異にしており、地史、地形、気象との関係における分布域の問題を考察する上でも極めて貴重である。このため、特異な分布を示すこれらの亜高山帯植生を保護するため設定する。	県境稜線に沿って、ミヤマナラ、カンコウラン、ニッコウキスゲ、ハクサンシャクナゲ、ササ類などが、フナ帯を抜けた山頂斜面において特有の景観やお花畑を形成している。とりわけ、ミヤマナラは日本海側の亜高山帯に多いミズナラの変種とされる。ミヤマナラ群落は、雪崩斜面や適度の積雪と激しい風衝地地形に発達している。ミヤマナラは、特有の地形を持つ日本海側多接地帯の亜高山帯では比較的普通に見られる。しかし、この地域のミヤマナラは、全国的に見るとほぼ南東端に当たり、基準種で高木性のミズナラとの関係等など種分化の問題、地史、地形、気象との関係における分布域の問題を考察する上でハイマツと並んで貴重な種となっている。この地域にはミヤマナラ群落が発達する地形とハイマツ低木林、ニッコウキスゲ草原等が地形に応じて分布域を異にしており、また、これらの山頂稜線域の亜高山性群落と、標高の低いフナ帯の高木性樹種の生育環境とを比較できる格好の場所となっている(林野庁2008、「平成20年度 緑の回廊設定にかかる基礎資料収集に係る調査業務報告書」)。保護林内は、ササ草原、落葉広葉樹低木群落が多く見られ、雪田草原はあまり見られない。毎木調査の対象となる林分は見られない。	流石山・大峠風衝地植物群落保護林は、ミヤマナラ群落やハイマツ群落などの風衝地低木群落を主体に、高山ハイデ及び風衝草原、ササ自然草原、雪田草原など、山頂稜線域の亜高山帯植生の保護を目的とした保護林である。このように、本植物群落保護林は、①⑤山頂稜線域の希少な亜高山帯植生を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：流石山・大峠風衝ミヤマナラ
植物群落保護林	成沢暖温帯性 なるさわ	2.32	暖帯林の北限に属し、モミ、カシ類、スタジイ等を主とした針広混交林の高齢林から形成されており、極相群落の典型的な特徴を示すことから自然環境の保全を図るため設定する。	保護林の中央部は谷地形となっており、そこには植栽起源と考えられる大径木のスギが生育している(第1回モニタリング地点はここに設定されている)。谷部の両側斜面部に、保護対象群落である、モミ、アラカシ、スタジイが混交して優占する高齢の針広混交林が分布している。高木層は高さ21~32m、胸高直径47~134cm(最大はモミ)程度。	成沢暖温帯性植物群落保護林は、暖帯林の北限に位置する針広混交林の高齢林の保護を目的とした保護林であるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。なお、本保護林は、植栽起源と考えられるスギの大径木も生育し、人為的な影響のみられる保護林である。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	西金砂常緑広葉樹 にしかなさ	14.39	照葉樹林帯と落葉樹林帯との中間的な要素を持った林分を保護するため設定する。また、林床植物の中には、ミヤマトベラのように北限になっているものや、ミヤスカシユリ、フクロダガヤ等の安山岩質集塊岩地域に限りみられるものもある。	蜂巣国有林の山腹中央~下部に分布する天然生林である。保護林内は、南斜面にはシラカシ、スタジイ、カゴノキなどの常緑広葉樹、北斜面にはフナ、イヌフナ、アカシテ、クリ、オノオレカンパなどの落葉広葉樹が多い天然生林が広がっている。保護林内は、南斜面にシラカシ、ウラジロガシなどの常緑広葉樹、北斜面にフナ、イヌフナ、アカシテ、クリなどの落葉広葉樹が優占する林相にある。高木層は高さ32m、胸高直径20~120cm(最大はスギ)程度。	西金砂常緑広葉樹植物群落保護林は、照葉樹林帯と落葉樹林帯との中間的な要素を持った林分の保護を目的とした保護林である。②分布の北限に近いスタジイやカゴノキなどの常緑広葉樹の生育する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：西金砂暖温帯上部スタジイ 暖温帯上部に成立している常緑広葉樹林であることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。
植物群落保護林	西丹沢フナ にしたんざわ	225.10	フナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林で、この地方では珍しく貴重でありこれを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径50~90cmの高齢級のフナが優占し、林床に生育するスズクモ現段階では比較的繁茂している。ただし、シカによる食害のため、低木層以下の植生は衰退の傾向にある。また、気象害の発生もあり、主木をなすフナの倒木や枯損も進行している。今後、このような状態が進行すれば、フナ群落の更新が進まない状況が懸念される。	西丹沢フナ植物群落保護林は、フナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する希少なフナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：西丹沢フナ
植物群落保護林	西丹沢モミ にしたんだわ	50.31	モミを主とした原生状態を維持している高齢の天然林で、この地方では珍しく貴重でありこれを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径40~80cmの高齢級のフナが優占し、保護対象種であるモミは、胸高直径30~70cm程度の個体が散在している。前回調査として比較して、高木層、亜高木層、低木層に変化はないが、草本層に生育するスズクモは継続して食圧に晒されおり、スズクモはさらに衰退している。シカ糞や食痕も多数見られる。保護対象樹種であるモミは、高木、亜高木のほか、生育量は少ないものの、低木、稚樹・実生の生育も認められる。	西丹沢モミ植物群落保護林は、フナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する、モミの散在した希少なフナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：西丹沢モミ
植物群落保護林	猫越暖温帯性 ねっこ	11.28	この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径40~90cm程度のウラジロガシの高齢木が優占し、スタジイ、ツブラジイ、アカガシ、タブノキなどの常緑高木の同齢木が混生する林となっている。ニホンシカによる林床植生の食害が著しい。前回調査時も指摘されていたが、食害はさらに進行し、裸地化、エロージョンが進行するに至っている。	猫越暖温帯性植物群落保護林は、照葉樹林帯の上限に位置し、ウラジロガシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。分布の上限で大径木のウラジロガシの優占する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：猫越暖温帯性ウラジロガシ

■【既設】植物群落保護林				10/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	ヒメシヤラ	122.15	ヒメシヤラがまとまって生育するのは、大変珍しく貴重である。また、箱根地域がヒメシヤラ群落分布の北限と言われている。これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径30～50cm程度のチドリノキ、カシカエデ、マメザクラ、オオモミジなどの中齢級の落葉広葉樹が優占する中に、胸高直径50～60cm程度の、他の樹種より幹径の太いヒメシヤラが散在する林相にある。高木層のヒメシヤラの一部には、大きな樹洞があり、ネクロシス、枝先の枯損等が見られ、樹勢は衰えて始めていると思われる。ヒメシヤラの低木、稚樹・実生は認められない。シカによる大きな食害も認められない。なお、本ヒメシヤラ植物群落保護林内におけるヒメシヤラの生育密度は低いが、隣接する保護林である、ハコネコメツツジ植物群落保護林内には、密度高くヒメシヤラが生育していることが確認されている。	ヒメシヤラ植物群落保護林は、分布の北限に当たるヒメシヤラが生育する落葉広葉樹林の保護を目的とした保護林である。ハコネコメツツジ植物群落保護林は、富士火山帯及び秩父地域に限られる希少な植物であるハコネコメツツジの保護を目的とした保護林である。これらの保護林は、②分布限界域等に位置する個体群対象とし、⑤岩角地といった特殊な立地条件の下に成立している個体群を保護対象としている。なお、両保護林内におけるヒメシヤラの分布は、ヒメシヤラ植物群落保護林内で生育密度が低く、ハコネコメツツジ植物群落保護林内で高いといった特徴がある。このため、一体的に管理することが妥当と考えられ、両保護林を統合した上で、希少個体群保護林に再編する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：箱根地域ヒメシヤラ・ハコネコメツツジ
植物群落保護林	ハコネコメツツジ	27.88	ハコネコメツツジは、富士火山帯及び秩父地域に限られる希少な植物であり、これを保護するため設定する。	本保護林内には、ミスナラやリョウウが優占する落葉広葉樹林が広がり、一部には、ヒメシヤラが優占する林分が分布している。ハコネコメツツジの生育は、頂上付近の西側斜面風衝地の一部に限られる。岩上に成立し、群落の面積は小さい。		
植物群落保護林	八幡岳周辺冷温帯フナ・ミスナラ はちまんだけしゅうへん	219.25	フナ・ミスナラ等の植物群落を保護するため設定する。	八幡岳の頂上から東側～南側の標高800～1,100mの急斜面(20～40度)に成立しているフナ、ミスナラ、カスミザクラ、コナラの群落。	八幡岳周辺冷温帯フナ・ミスナラ植物群落保護林は、⑦当該地域の冷温帯落葉広葉樹林の代表的な林相の保護を目的としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：八幡岳周辺フナ・ミスナラ
植物群落保護林	花瓶山冷温帯性 はなかめやま	11.93	温帯性天然生林で、植物分布上内陸的要素を持った種が混生する学術上貴重な森林であり、これを保護するため設定する。	花瓶山有林の山頂部～中央部に分布する天然生林である。保護林内には、フナ、イヌフナ、ミスナラを主とする天然生林が広がっている。高木層は高さ28m、胸高直径20～90cm(最大はアサダ)程度。	花瓶山冷温帯性植物群落保護林は、イヌフナが混在したフナ天然林の保護を目的とした保護林である。①内陸性のイヌフナを含むフナの天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：花瓶山フナ・イヌフナ
植物群落保護林	原付天然ヒノキ はらつき	9.01	ヒノキ天然分布の北限で、学術及び森林施業上の考証として必要のため設定する。	胸高直径20～60cm程度のヒノキが優占し、下層植生はヒノキの低木の他に、コナラ、ヒサカキなどが生育している。	原付天然ヒノキ植物群落保護林は、分布の北限に当たるヒノキの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。②分布北限に当たる希少なヒノキの優占する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：原付ヒノキ
植物群落保護林	万三郎シャクナゲ ばんざぶろう	1.29	ホンシャクナゲの亜種にあたるキョウマルシャクナゲの密生群落で貴重であり、これを保護するため設定する。	キョウマルシャクナゲは低木層から草本層にかけて優占して生育し、好適な生育状態が維持されている。当該地は尾根上に位置するため、強風によると思われる上層木への被害が見られる。陽光地を好むキョウマルシャクナゲを含む低木層は、このように強風により上層木が枯損することで維持されていると評価される。	万三郎シャクナゲ植物群落保護林は、ホンシャクナゲの亜種にあたるキョウマルシャクナゲの密生群落の保護を目的とした保護林であるが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	万二郎ドウダンツツジ ばんじろう	0.01	ドウダンツツジとしては、珍しい大木でありこれを保護するため設定する(根廻1.62m、樹高5m)。	保護対象はドウダンツツジの大木で、根周り1.62m、樹高5.0m。シカの食害を防止するための対策が取られてはいるものの、崩壊が進んでいる状況にあり、足をまたいで入れるぐらいまで網が下がった箇所や、保護網が剥がれてしまっているため、萌芽枝がシカの食害を受けている箇所があったりしている。このため、十分な保護対策が取られているとは言い難い状況にある。保護林として指定されている単木のドウダンツツジは『ドウダンツツジではなくサラサドウダン』であることが確認されている。	万二郎ドウダンツツジ植物群落保護林は、サラサドウダンとしては珍しい大木を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	日山ミスナラ ひやま	21.13	阿武隈山地の原生林に準ずる天然生ミスナラ林を保護するため設定する。	保護林内の斜面部にミスナラの優占する樹林が分布し、谷部に、フナやケヤキの優占する林分が分布している。次世代を担うミスナラの低木や稚樹は少ないものの、中齢から高齢級のミスナラが多く生育し、保護対象であるミスナラ群落は、良好な状態で維持されている。ナラ枯れなどの病虫害は発生していない。高木層は高さ17～20m、胸高直径25～110cm(最大はミスナラ)程度。	日山ミスナラ植物群落保護林は、大径木を含む天然生のミスナラ林の保護を目的とした保護林である。①大径木を含む希少なミスナラの優占する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：日山ミスナラ
植物群落保護林	深沢ヒノキアスナロ ふかさわ	175.28	天然生ヒノキアスナロ群落の純林を保護するため設定する。	保護林全体に中齢から高齢級のヒノキアスナロが生育し、林床には低木・稚樹が多くみられて自然更新の状況も確認され、保護対象であるヒノキアスナロ群落は、良好な状態で維持されている。高木層は高さ18～25m、胸高直径25～70cm(最大はヒノキアスナロ)程度。	深沢ヒノキアスナロ植物群落保護林は、純林を形成しているヒノキアスナロの保護を目的とした保護林である。①ヒノキアスナロの純林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：深沢ヒノキアスナロ

■【既設】植物群落保護林				11/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	富士山崩塚亜高山帯 ふじさんとやづか	4.84	標高1,500m~1,600mの富士山の亜高山帯植生を代表するウラジロモミ、ハリモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が混交する天然林で、富士山の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	本保護林は、富士山の西側にあり、標高1,500~1,600mに位置する。ハリモミ、ウラジロモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ、シナノキ、サワグルミ、オオイタヤメイゲツ等の落葉広葉樹が混生する天然林である。旧噴火口の頂上部に設定された保護林で、噴火口の外輪付近から外側では、胸高直径70~90cm程度のウラジロモミが混生して優占している。スタケへのシカ被害は、前回調査時と同じく、ほとんど葉が残っていません。そのほかの状況は、そのほか前回調査時よりも減っている。保護林外の噴火口外側斜面にはスタケが密度濃く見られるが、それらもすべて棒のみで、今後、土壌浸食が進む恐れがあると考えられる。	富士山崩塚亜高山帯植物群落保護林は、標高1,500m~1,600mの富士山の亜高山帯植生を代表するウラジロモミ、ハリモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が混交する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤旧噴火口（寄生火山）といった特殊な立地に成立している亜高山帯植生を保護対象としていることから、希少個体群保護林とする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。寄生火山の山麓部も含む保護林の外周部に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	希少個体群保護林 新名称：富士山崩塚ウラジロモミ
植物群落保護林	富士山六番低山帯 ふじさんろくばん	6.17	標高1,000m~1,100mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、カエデ等落葉広葉樹と主とする天然林で、富士山の植物の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径35~100cm程度の老齢のブナ・ケヤキと、カエデ類であるメクスリノキ、オオモミジ、オニイタヤなどが混生して生育し、ブナとカエデ類が混在した混交群落形成されている。シカの食害により下層植生は少ない。保護林内にシカ柵（10×10m程度）が5箇所ほど設置されている。柵内の植生は回復傾向にある。柵の外内では植生調査を行い、シカによる植生への影響を調べることができる。シカ柵はプラスチック繊維のネットで、ファスナーの出入り口があり、中へは簡単に入れる。	富士山六番低山帯植物群落保護林は、標高1,000m~1,100mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、カエデ等落葉広葉樹と主とする天然林の保護を目的とした保護林である。②暖帯上部に残存し、ブナが混在する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：富士山六番低山帯ブナ 低山帯に遺存して生育するブナであることを強調するため、「低山帯」を挿入する。
植物群落保護林	法師ネスコ ほうし	3.47	原生林に準ずべき森林（クロベ（ネスコ）、コメツガの純林で、この地方には珍しい林相を有する）で、学術及び森林施業上の考証として貴重なため設定する。	赤沢山の北側の稜線から延びる尾根上にあり、北~北東側斜面に面している。主たる樹種はコメツガ、クロベ（ネスコ）、ブナ、ミズナラ、その他広葉樹で、樹齢101年以上の天然林。チシマザサ-ブナ群団、アカミノイヌツゲ-クロベ群団が確認され、周辺はチシマザサ-ブナ群団の他、カラマツ植林が分布する。高木層は高さ16~20m、胸高直径40~101cm（最大はクロベ）程度。なお、保護林の周辺は、落葉広葉樹林が主体をなしているものの、一部の尾根には、クロベ等の生育が認められる。	法師ネスコ植物群落保護林は、当該地域には珍しいクロベやコメツガの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。5haの面積要件は満たしていないが、管内にクロベ群落は少なく、①本保護林は中齢から老齢級のクロベが多く生育し、良好な状態にあるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南西側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	武尊山カラマツ ほたかさん	1.83	推定林齢130年生程度の人工林カラマツの保護（点生木扱い4本）。	保護林内には、胸高直径90cm程度のカラマツが4本と、胸高直径40cm程度のカラマツが1本植えられている。奥に蚕稲荷のお堂があり、その歩道入口と途中に植えられている。大径木のカラマツは、下枝の葉量が落ちており、樹勢が若干衰えている。	武尊山カラマツ植物群落保護林は、植栽されたカラマツの大木を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	本坂峠のヤブツバキ ほんざかとうげ	1.60	林齢200年以上に及びヤブツバキが群生しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	本保護林は、アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ、タブノキなどの常緑樹が優占する林相にあり、林内の亜高木層や低木層にヤブツバキが生育する状態にある。ヤブツバキの実生個体、後継個体は少ない。なお、保護林に隣接する南道側には、ヤブツバキを含む常緑広葉樹林が分布している。	本坂峠のヤブツバキ植物群落保護林は、①林齢200年以上に及びヤブツバキが群生しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定している。5ha未満であるが、林齢200年以上に及びヤブツバキ群落は学術上貴重なため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南東側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	本谷お礼杉第1号 ほんたに	0.03	伊豆天城山が徳川幕府の天領として、韮山代官が管理していた頃（宝暦時代）地元村民が雑木や下草採取のお礼としてスギを植栽したもので「お礼杉」と呼ばれている。天城山におけるスギの生育状態を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	本保護林は江戸時代に植栽されたスギ。保護対象個体：本谷お礼杉（9本）。説明看板からは、平均樹高39m、平均胸高直径116cm、樹齢170~180年とある。対象木の活力度は中程度。後継樹なし。周辺はスギ植林及びヒメシヤラ等低木の植栽。	本谷お礼杉第1号植物群落保護林は、江戸時代に植栽されたスギの樹群を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止
植物群落保護林	本谷お礼杉第2号 ほんたに	0.02	伊豆天城山が徳川幕府の天領として、韮山代官が管理していた頃（宝暦時代）地元村民が雑木や下草採取のお礼としてスギを植栽したもので「お礼杉」と呼ばれている。天城山におけるスギの生育状態を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	本保護林は、保護林台帳から、江戸時代に植栽されたスギ。保護対象個体：本谷お礼杉（5本）。対象木の活力度は中程度。後継樹なし。周辺はスギ植林及びヒメシヤラ等低木の植栽。	本谷お礼杉第2号植物群落保護林は、江戸時代に植栽されたスギの樹群を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。	廃止

■【既設】植物群落保護林				12/12		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	幕張峠ミスナラ・シラカンバ まくはりとうげ	151.47	カラマツ人工林はミスナラ、シラカンバの混交により、天然林状となっており、風致施業を考える指標となる林型であるため設定する。	ミスナラ、シラカンバが優占し、カラマツ他が点在する天然生林である。戦場ヶ原湿原の南部に広がる標高約1400mの概ね平坦地に成立する。保護林内には、かつてのカラマツ人工林にミスナラ、シラカンバ等が混交している林分が広がる。高木層は高さ26m、胸高直径15-105cm（最大はミスナラ）程度。	幕張峠ミスナラ・シラカンバ植物群落保護林は、ミスナラ・シラカンバの混交が進むかつてのカラマツ人工林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしてはいるものの、風致施業を考える指標となる林型の保存を目指したもので、保護林としての希少性がそれほど高くはないと考えられる。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	増沢モミ ますざわ	3.90	天然生モミ群落を保護するため設定する。	次世代の低木や実生は少ないものの、中齢から老齢級のモミが多く生育し、保護対象であるモミ群落は、良好な状態で維持されている。高木層は高さ20~26m、胸高直径40-100cm（最大はモミ）程度。	増沢モミ植物群落保護林は、モミが群生する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落である。また、保護林に隣接する南側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南側区域の分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	万座天然カラマツ まんざ	22.96	本植物群落保護林は、白根山の代表的な天然カラマツで、大正、昭和にかけて母樹林として種子を採取し、カラマツの植林が行われた。	保護林内は、ほぼカラマツが占め、シラビソ、トウヒ、コメツガなどが少数混生する。立ち枯れた木がいくつかみられるが、シラビソで、カラマツの枯損は見られない。競合する樹種としてシラビソ、トウヒ、コメツガが考えられるが、現在のところ、カラマツよりも背が低く、また競争に負け立ち枯れた株も見られるため、今後もカラマツ林として維持されていくものと思われる。林床はクマイザサが繁茂し、その他の低木や草本はほぼない状態。	万座天然カラマツ植物群落保護林は、火山噴出物上に成立したカラマツの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。⑤火山噴出物上で土地的極相林を形成しているカラマツなど、希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：万座カラマツ
植物群落保護林	南房総暖温帯性 みなみぼうそう	4.24	モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シテ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林であり、これを保護するため設定する。	保護林全体に高齢から老齢級のモミが生育し、また、中齢から高齢級のアラカシやウラジロガシが混生している林相にある。高木層は高さ19~28m、胸高直径40-100cm（最大はモミ）程度。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うモミ・ウラジロガシ・アラカシなどの低木や稚樹は全く見られない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、モミ・カシ類混交群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。さらには、林床の植被率の低下により、急傾斜地では根の露出が進行しており、このまま裸地化が進行していくと、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるものと評価される。	南房総暖温帯性植物群落保護林は、モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シテ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落であるとともに、干葉管内には少ない保護林の一つである。また、保護林に隣接する北東側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する北東側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。	保留
植物群落保護林	宮ノ沢モミ みやのさわ	0.95	モミを主とした代表的な温帯性原生林で学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	宮ノ沢国有林の集落裏に隣接して分布する天然生林である。保護林内はモミが優占する林相にある。また、保護林に隣接する区域にも良好に生育しているモミ群落が連続している。	宮ノ沢モミ植物群落保護林は、高齢木からなるモミが優占する天然林を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、周辺は民有林に取り囲まれ、保護林拡張の検討も不可である。このため、面積が小さ過ぎ、保護林としての機能が期待できないため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
植物群落保護林	茂庭ブナ もにわ	1,291.50	学術的価値の高いブナ群落が生育する場所として、植物群落及び歴史的、学術価値を有する群落の維持を図るため設定する。	中齢から老齢級のブナが広面積に多く生育し、保護対象であるブナ群落は、良好な状態で維持されている。旧国道13号線はひどく荒れており、また、ニツ小屋トンネルは崩落の危険があるため、到達は不可である。駐車位置までのアプローチが改善されない限り、調査は困難である。	駐車位置までのアプローチとして利用する、旧国道13号線はひどく荒れており、また、ニツ小屋トンネルは崩落の危険があるため、平成20年度のモニタリング調査以降、到達は不可である。駐車位置までのアプローチが改善されない限り、調査は困難であるため、判断を保留する。【別添資料参照】	保留
植物群落保護林	八溝山冷温帯性 やみそさん	29.49	県下唯一の温帯性落葉広葉樹林を保護するため設定した。また、茨城県内では唯一ここでしか見られないダケカンバの群落がある。阿武隈山地に分布しているオヤリハグマの南限であり、八溝山はツガの北限になっている。	八溝国有林の山腹上部~中央部に分布する天然生林である。保護林内には、ブナ、ミスナラ、カエデ類、シテ類の天然生林が広がっている。保護林内は、ブナ、ミスナラ等が優占する林相にある。高木層は高さ23m、胸高直径20-90cm（最大はブナ）程度。また、ダケカンバについては、南側の尾根に小径木の個体が僅かながら生育している状況にあることが確認されている。	八溝山冷温帯性植物群落保護林は、北限のツガ、茨城県内唯一のダケカンバを含む、ブナ、ミスナラ、カエデ類、シテ類の天然林の保護を目的とした保護林である。②分布北限のツガ、①②県内唯一のダケカンバを含む天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：八溝山冷温帯ツガ・ダケカンバ 冷温帯に生育するツガ、ダケカンバであることを強調するため、「冷温帯」を挿入する。

■【既設】特定動物生息地保護林				1/2		
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
特定動物生息地保護林	笠堀カモシカ かさぼり	5,268.97	笠堀ダムの上流部に広がるブナ、ミズナラ、ヒメコマツ等の天然林を保全し、同地域をカモシカの生息地として保護するために設定する。	当該林分は中ノ又山、矢筈山、粟ヶ岳等の稜線より西側斜面の標高200～1,260mに広がる、ブナ、ミズナラ、ヒメコマツを主体とする林齢121年生以上の広大な天然林である。チシマザサ-ブナ群団、ブナ・ミズナラ群落、クロベ・ヒメコマツ群落、自然低木群落、自然裸地などで構成されている。急傾斜の雪蝕斜面が広がり、光明山への登山路以外には立ち入りは困難である。2006年のカモシカ調査では、笠堀湖周辺のカモシカの生息密度は1.55頭/km ² であり、同調査における他の調査区と比べ生息密度は低い。ただし、生息密度は安定していると報告されている（H22基礎調査報告書）。	笠堀カモシカ特定動物生息地保護林は、中ノ又山、矢筈山、粟ヶ岳等の稜線より西側斜面の標高200～1,260mに広がる広大な天然林で、チシマザサ-ブナ群団、ブナ・ミズナラ群落、クロベ・ヒメコマツ群落、自然低木群落、自然裸地などで構成されている。また、本区域は、カモシカの生息環境として保護するための保護林として設定されている。①国指定特別天然記念物であるカモシカの生息地の保護を目的としているため、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：笠堀カモシカ
特定動物生息地保護林	片庭姫春蟬 かたにわ	0.30	古来からヒメハルゼミ（姫春蟬）の生息地として著名である。東洋温帯亜熱帯性ゼミで北限となっている。毎年7月上旬より下旬にわたって多数発生、シイの老樹に集まって合唱する。一匹が鳴くと後をついで集団で鳴き、その鳴き声が大いことから、地元では大蟬とも称している。移動性はない。	保護林内は、全体的にヒノキが優占しているものの、ヒノキに混じて中齢から高齢級のスタジイ、シラカンが混生する林相にある。ヒメハルゼミの生息環境としては、上層にスタジイなどの高木類が繁茂し、林内に羽化場所となる常緑低木が多く生育していることが好適な条件となる。保護林内の林内には、常緑高木、低木類も少ないため、ヒメハルゼミの生息環境としては、あまり好適な状態とは言えないのが現状である。むしろ、保護林に隣接しているスタジイ林が主要な発生環境になっている。保護林は天然記念物に指定されている。	片庭姫春蟬特定動物生息地保護林は、古来からヒメハルゼミ（姫春蟬）の生息地として著名であり、これを保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、保護林およびその周辺は、文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物として担保されている。このため、廃止し、引き続き機能類型を自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図る。【別添資料参照】	廃止
特定動物生息地保護林	雨生池アマゴイルリトンボ まごいがいけ	12.75	雨生池を中心とするブナ、ミズナラ主体の天然生林を保全し、アマゴイルリトンボ生息地の保護を図るために設定する。	本保護林は、池の周囲をブナ林が取り巻き、地形上人為的環境の低い保護林である。自然観察を目的とした利用者の立ち入りが多く見られる。アマゴイルリトンボは林内の光のスポットを縄張りとして生息している。成虫の飛翔季節は6月～9月とされている。なお、雨生池に隣接する池として大池があり、その池は、池の周辺に抽水植物が繁茂しており、アマゴイルリトンボが多く発生するとの情報が得られている（三条ホテルの会「アマゴイルリトンボ観察会」）。	雨生池アマゴイルリトンボ特定動物生息地保護林は、アマゴイルリトンボの生息環境となる、池の周囲の天然林の保護を目的とした保護林である。①全国的に希少なアマゴイルリトンボの生息環境を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：雨生池アマゴイルリトンボ

■【既設】特定動物生息地保護林

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
特定動物生息地保護林	蓮華ライチョウ れんげ	974.82	ハイマツ及び高山荒原雪田群落（白馬山系高山植物地帯）を保全し、ライチョウ生息地の保護を図るため設定する。	本保護林には、高山低木群落、高山ハイデ及び風衝草原、雪田草原、ミヤマハンノキダケカンバ群落などが分布している。ハイマツ群落は、群落高が低いものが多く、ライチョウの繁殖環境として好適な状態が保たれていると考えられる。また、ハイマツ群落に接して、高山ハイデ・風衝草原、雪田草原、高茎草原、風衝低木林、ガシ場など、ライチョウの採餌、休息、砂浴びの場となる環境が分布しており、多様な植生環境を必要とするライチョウの生息環境は良好に保たれていると評価される。本保護林とその近辺においては、成鳥♂16、成鳥♀10、不明4の30羽が確認されている。また、縄張り数は19個あると推定されている（富山県1978）。保護林東部の稜線を踏査した結果、小蓮華東部の緩斜面にメス1羽と雛5羽の親子が確認された。また、登山者からの聞き取りから、小蓮華西部、小蓮華山頂部、乗鞍岳山頂付近（保護林外）でもライチョウの生息が確認された。確認された場所から、ライチョウにとって好適な環境は、傾斜のゆるい尾根上のがれ場にハイマツ群落と高山荒原雪田群落がパッチ状に分布している場所と思われる。	蓮華ライチョウ特定動物生息地保護林は、ハイマツ及び高山荒原雪田群落（白馬山系高山植物地帯）などで構成されている。また、本区域は、ライチョウの生息環境として保護するための保護林として設定されている。①国指定特別天然記念物であるライチョウの生息地の保護を目的としているため、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：蓮華ライチョウ
特定動物生息地保護林	火打山周辺ライチョウ ひうちやま	826.74	裏金山～焼山～影火打～火打山～雷鳥平の連なる稜線で、ハイマツ及び妙高山連峰高山植物地帯を保全し、ライチョウ生息地の保護を図るため設定する。	火打山において、ハイマツ群落や雪田草原は、なだらかな山頂や尾根付近に分布している。信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設研究業績 40：1-8（2003）の、火打山におけるライチョウのなわばり個体数と生息数に関する報告によれば、火打山の山頂付近から東西方向と北に伸びる3つの比較的なだらかな尾根において、8箇所のなわばりの存在が推定され（1箇所の大きさは尾根沿いに長さ500m、幅250m程度）、生息数は21羽と推定されている（2002年調査）。火打山のライチョウは、日本最北限、最少の個体群である。なお、本業務で行った現地調査の結果によれば、火打山から影火打の区間は、ライチョウの生息に必要とされる環境が極めて少なく、また、それぞれの要素が距離的に離れており、生息に十分な環境が維持されているとは言えない。焼山はハイマツの樹高が低く、高山ハイデ・風衝草原も広がり、火打山～影火打とは違った環境が形成されている。ライチョウの主要な生息環境となっている可能性があると考えられるが未確認。本保護林は、ライチョウの生息にとって十分な環境が維持されているとは言えない。しかし、文献資料によれば、本保護林に分布している風衝低木林などでも繁殖する可能性が指摘されているため、今後は、ライチョウのテリトリー分布と植生分布との関連を把握できる調査を実施し、本保護林を構成する植物群落の利用特性を解明していくことが必要であると考えられる。	火打山周辺ライチョウ特定動物生息地保護林は、ハイマツ及び高山荒原雪田群落（妙高山連峰高山植物地帯）などで構成されている。また、本区域は、ライチョウの生息環境として保護するための保護林として設定されている。①国指定特別天然記念物であるライチョウの生息地の保護を目的としているため、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：火打山周辺ライチョウ

■【既設】特定動物生息地保護林							1/1
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称	
郷土の森	菅名岳 すがなだけ	214.46	五泉市の東部にそびえる名峰菅名岳の貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰菅名岳を利用するなかで、地域復興にも寄与するよう積極的な活用を図るため設定する。	保護林内は、地形条件、立地条件に応じて、老齢木からなる溪畔林や、ブナ林、多雪地形に対応した矮性ブナ林など、様々なタイプの森林植生が分布している。また、ブナ、トチノキともに老齢の大径木が多く分布し、沢沿いの老齢木に着生するシダ類や、陰湿な谷地形に生育するシダ類など、特徴的な植物の生育も見られ、郷土の森としての景観資源に優れた良好な状態で維持されている。	郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、菅名岳郷土の森は、老齢木からなる溪畔林や、ブナ林、多雪地形に対応した矮性ブナ林など、様々なタイプの森林植生の保護を目的とした保護林である。⑦地域で活用される貴重な天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。	保留	
郷土の森	博士山 はかせやま	204.02	貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰博士山を利用するなかで地域復興にも寄与するよう積極的な活用を図るため設定する。	保護林内は、博士山山頂付近まで主にブナ林が広がり、沢沿いにサワグルミやトチノキの群落が見られる。また、尾根沿いにはクロベやアスナロが生育している。	郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、博士山郷土の森は、ブナ林や、沢沿いのトチノキ・サワグルミ林、尾根部のクロベやアスナロ林など、様々なタイプの森林植生の保護を目的とした保護林である。⑦地域で活用される貴重な天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。	保留	
郷土の森	恵みの森 めぐみのもり	470.45	ブナを主体とする森林を保護するとともに、当該地域の歴史・文化的背景を踏まえた活用を図るため設定する。	保護林内は、大部分が高齢から老齢級のブナが優占したチシマザサ-ブナ群団で、一部にブナ-ミズナラ群落、常緑針葉樹林がある。	郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、恵みの森郷土の森は、大部分が高齢から老齢級のブナが優占したチシマザサ-ブナ群団で、一部にブナ-ミズナラ群落、常緑針葉樹林が分布している。このように、本郷土の森は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。 ■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。	保留	